

川柳塔

昭和四十二年一月九日
昭和五十七年十一月十五日
印刷 郵便物認可
発行 毎月一日発行
創刊 大正十三年 通卷 六〇六号



日川協加盟

No. 606

特集・はたらくうた

十一月号

「旅人」以後の

麻生路郎作品

(42)

三十九年六月号

不朽洞句帖

夕日赤けれども警手無表情

盗られても銀行 残は合わしとく

どうもしないのに老女は身構える

元愛人をエスカレーターから見付け

性器の陳列都おどりとか名づけ

祇園境内にて

天気晴朗やまがらに養われ

三十九年七月号

不朽洞句帖

カガリンと握手した日もあったけど

妻いつか襟垢のよに 体臭のよに

たれに買ってもらった振袖かい 錦魚

硬貨のぬくみ鍵ッ子の掌に

あれが初恋かしら 鍵ッ子のころ

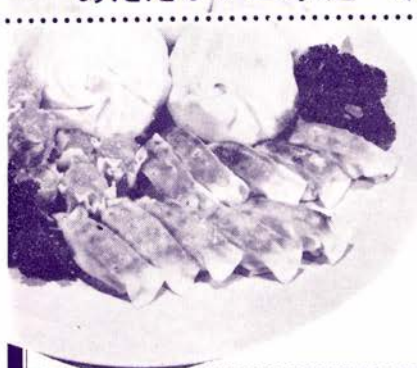
鍵ッ子だったからか 虫けらに魅了

肩たたかれるまで鍵ッ子は虹へ立ち

鍵ッ子は働らく母の味方なり

(傍島静馬)

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶ た ま ん や き ぎ ょ う ぞ
豚 饅 ・ 焼 餃 子
し ゅ う ま い ち ゃ あ し ゅ う ま ん
焼 売 ・ 叉 焼 饅

大 阪 ・ な ン バ



TEL (641) 0551

〔支店・出張店〕

なんば高島屋 心齋橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
近鉄百貨店 (アベノ店・上本町店・奈良店)

た　ぬ　き

先月中頃、山田五十鈴の『たぬき』を大阪朝日座で観た。今までにもテレビで見たり、紙上の評判で、さしても珍らしい感じもせぬ位お馴染みではあったが、さすが実際に舞台で観ると——殊に、五十鈴の実父の山田九州男は、私達の書生時代、名女形としてこの弁天座（現在の朝日座）によく出演した居た記憶もあって——私にとつては郷愁みたいな雰囲気も手伝つてか、さかんに宣伝して最高の女優などといわれるのも、大してオーバーでないように思えて楽しかった。いつも言うことだが、こうした名優の真剣な積み重ねによる迫力を肌を感じるその瞬間、現在の世相が余りにも背伸びがちで、上辺りで、如何に虚しいものかを痛感せずには居れぬ。ここで最近読んだ吉川英治の川柳常識読本の中から拝借したい言葉がある。「自分の想の価値に厳格な人、自身の作句に謙譲を多く持つ人は、必ず川柳の真へ味到する者である」

薬石効なくゴキブリに似た男

目かくしをされて自惚れむせて居る

弓削の川柳の小径

川柳小径八十翁が身構える

川柳小径すべりすべり老の意地

川柳小径爽やかに老翁息が切れ

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 十 一 月 号

座右の句

竹割った気性などと腹黒さ

(生々庵)

私の句

想い出がいっぱい軍歌よくうたう

植村 客遊子

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

たぬき

古本屋五十年

中島生々庵 (1)

俳風柳多留廿五篇研究

(十六)

長野 文庫 (2)

清水 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (34)

絵筆と針

東野 大八 (22)

秀句鑑賞

(同人吟)

尼 緑之助 (26)

愛染帖

山本 素郎 (27)

書評・柳行李

橘高薫風選 (46)

句集「望郷」を手にして

戸田 古方 (28)

菊沢 小松園 (33)

「本に関する話」

古本屋五十年

長野 文庫

空襲攻撃を受けて川柳関係の蔵書を全部失ったので、終戦後またはつぼつ集めはじめ、現在相当量の本や雑誌が集った。克明に読んだものもあるが全然読んでいない本も多い、先年神戸の同業者から頒けて貰ったダンボール箱九個入りの各地の柳誌二千冊も、そのうち三箱開いたままで残りの六個はそのままだになっている。

「川柳塔」の前身「川柳雑誌」も創刊から第五巻までと、その後不揃いだが大分集めている。「番傘」も創刊号から終戦まで完全揃いを入手した。

現在私の仕事はそれらの古書、古雑誌から愛媛県関係の史料を摘出しいるのだが再度見ることあるまいと一読後乱雑に箱の中へ放りこんでいるので、再調査の時に間違つこともしばしばである。

ずっと前にも前田伍健編著の「一糸集」がどうしても見つからない事があった。この本は昭和三年に二百部発行したもので現在県内柳人です持しているのは四人しか居ない。それに私が所持しているのは扉に著者伍健の鯉の絵と「なんばでもあるぞと蒲

路郎選・古川柳の味……………八木摩天郎……………(49)

合同句集「竹の里」発刊記念……………時 広 一 路……………(32)

はたらくうた(同人特集)……………津守柳信・横田英詩・辻 圭水・内芝としよ……………(42)

時 広 一 路……………森田カズエ・平田実男・錦織文字……………

52年度二賞発表句会と総会……………有 信 新之助……………(30)

雅号ぶっちゃけばなし……………大 森 孝 華……………(67)

初歩教室……………本 田 恵 二 朗……………(52)

大萬川柳「限界」……………川 村 好 郎 選……………(54)

柳界展望……………(庸 佑・整理)……………(58)

本社十月句会……………小 林 由 多 香 選……………(62)

各地柳壇(佳句地10選)……………岩 井 本 蔭 棒 選……………(50)

「秋晴れ」……………舟 木 与 根 一 選……………(50)

一路集「千歳飴」……………吉 原 紅 月 選……………(51)

「勤労感謝」……………(二三夫・葉子)……………(69)

編集後記……………

座右の句

三等がよいとおふくろ困らせる

私の句

花嫁の父の涙は許される

(多久志)

植 山 武 助

の水は落ち」の句が書いている上、出版当時余り売れなかったもので「是非買って貰い度い」との宣伝ビラまで折り込んでいた稀観本である。大あわてで探しまわって、やっと見つけた時の嬉しさ。(その位乱雑な物置きなのである)

話が変わるが、私は毎日何人かの古書趣味の人に接しているのだが、それらの人々は探書の目的もまちまちで随分妙な人も居る。即ち「①初版、初刷、第一刷の本ばかり集めている人、②特定の著者のものばかり集める人、③特定の内容に限る人、④地方郷土史の専門家、豆本以外には目もくれぬ人」などが居る。辛抱強い人で「茶道誌談交」を七年半かかって三百五十六冊欠号なく蒐集した人も居る。埼玉県川口市の人で「今治綿ネル工業発達史―昭二年版」を追いつけている人も居るが未だ入手しない。

この間も拙著「愛媛川柳の流れ第二巻」の表紙だけが欲しい、と云って来た人が居た、これは川柳塔同人の水粉千翁氏が装釘したもので「画会の教材に使い度い」とのことであった。見事なかつぱの絵に惚れたのである。

私は貧農の四男に生れたため、小学一年の教科書から古本になじみ、長じて古本屋を始め五十年以上続いているので「本」に就ての話は尽きぬがまたの機会にゆずる。品切れのままそこで話し込み 路 郎



中島生々庵選

亡夫一周忌の庭に

島根県
杵

みどり

庭すみにそつと清らかな花ききよう

新盆を信じられない仏間の灯

絶えた灯をともし心の詩をよむ

はりさける心の叫びみる鏡

夕顔にくずれる虚勢の涙おち

泉佐野市
阿 萬 萬 的

集落の屋根寄りそうて霧の中

千体地藏の前垂れくらしの匂いする

夢二描くある底辺の女の眼

コンパクトお喋り終った顔なおす

子に妻に不孝な父で趣味多く

大阪市
小 出 智 子

植木屋の植木のようにいかぬ自我
生き方をすこし変える爪の彩

氣にすればとても氣になるキリギリス
私立でもよいかと十五に悩みあら
情うすく育ちなさけに脆くなる

大阪市
金 井 文 秋

人形の首なら接着材でつき
あきらめてしもたか癖を注意せず
いい返事待つと勝手に決めて行き
小休止せよとささやく更年期
男一匹マイホーム主義

大阪市
河 野 君 子

姑逝ってからの家風をことさらに
相性へ浮きつ沈みつする曆
消え入る前の炎に騙されやすくいる
身分を飾る男の勲章錆びている
美しい秘めごと解いてる十三夜

宝塚市
傍 島 静 馬

本人より主治医は妻に云い含め
不発弾そつと抱えて退院す

不味いなと云えば高いほう買いはれ
持てないやつがええとこ見せたがり
おばさんと呼ばれオバハン眼を細め

今治市 月原宵明

底辺の夫婦が酒を酌ぎ合うて
真実を探せば秋の海碧し

すばらしい明日を信じて点眼す
この町の時計にされて鞆提げ
武装したわたしを家族送り出し

和歌山市 吉野富子

狂い咲くさつき残暑のはげしさに
愛一途に耐えた絆を切った亡夫
薄給の見果てぬ夢追うマイホーム
振り向かぬつもりへうづく過去の傷
風鈴の音色初秋の彩添える

和歌山市 垂井千寿子

肩書きは無いが波風立たぬ家
だまつてる目が一番よく喋り
空白の余生を染める彩を選ぶ
白旗は持てない亡夫が見てるから
お袋の味に似て来て倦怠期

柏原市 大峠可動

一筋の道しか描けず汗を拭く

カルテから脱出 祝盃の唄続く

曼珠沙華若い血潮を驕るかに
世に馴れて女の日課尖りがち
路傍の実褪せて敗北感語る

竹原市 森井菁居

完全犯罪出来ぬ男で詩を綴り
ここで猪口受ければ負けたことになる
男一匹 俺のレールは俺が敷く
身の程を知ってミミズは逃げて勝ち
みなさんのお蔭 一日を丸く閉ず

松江市 中川晃男

好き合ったとこで仲人頼まれる
もう事故は起こさぬとこに立つ地藏
地藏様いくつになってもよだれかけ
湯の宿の浴衣にかくす妻の歳
仕舞湯へ聞かせてくれる虫の声

京都市 松川杜的

熱帯魚(3句)

水槽にも縄張りがある熱帯魚
剽軽に泳いでエンゼルボスで居る
ロングスカートひらひらグッピーのスター振り
商魂の果ては捨値と云う値札
秋の気配知ったか鈴虫もう鳴かず

宇部市 平田実男

何不自由ない表情で語る手話

宗教家のエアーポケット子が自殺

人間はひきよう自殺で場を逃れ

海国日本海の狭まへ泣かされる

養老院に来てまで子等を賞めちぎり

愛媛県

渡辺 曉 童

小瓶一本 至極満悦

おなかの虫に 行く道をきく

金看板の 早寝早起き

心の糧も 金と知る歳

ちぢまって寝る 彼岸すぎの夜

和歌山市

津田 与 史

嫌われる運命を知らぬ油虫

淡々と生きる理想に遠ざかり

仲好しに見せて近所に好き嫌い

ああそれなのに目減りの冷酷さ

去年とはまた違う風秋の風

東大阪市

市場 没食子

出嫌いと出好き金婚あと僅か

ポーナスの無いのが寂し職辞めて

父母音痴子供は歌手を志し

この秋に縁談もなし暮迫る

妹婿逝く

年順と思えど寂し死顔よ

島根県

小砂 白 汀

ベビーカーにジャンボトラック手を振られ

モデルガンだけが味方の自閉症

ハラハラと熔接火花落涙す

駆け抜けて見たしと思う炎の輪

金封に肌のぬくみと冷めたさと

大阪市

川口 弘 生

末席は冷たい酒で酔わされる

蟬しぐれ自分の声で参加する

繋れる首輪に飼犬という誇り

馴れ切った夫婦或る日の隙間風

その手にはのるまい声が甘すぎる

大阪市

神谷 凡九郎

どの鉦押したら僕が動くのか

リモコンをみんなに預けたように生き

自画像に塗る彩どりを決めかねる

大空の無情こだまにさえならぬ

親の道子の道指標はそれぞれに

呉市

植田 英 詩

古き良き時代の味を旅で知り

山頂に天下を取った顔で佇ち

噂して女たがいに妬いている

遠吠えを自信の顔は聞きながし

子の巣立ち夫婦に長い夜がくる

八尾市

香川 酔 々

人間のドラマが沈んでいる宿場

大津絵の鬼懸命に鉦叩く

どん底へひとすじ届く蜘蛛の糸
落葉たく煙目に滲む果の宿
木曾山中お六の恋に霧が降る

倉吉市

奥谷弘朗

もの好きのように取られている善意
母ちゃんに惚れて来たかと娘に聞かれ
散歩道同じコースに四季があり
定年をいたわる妻の茶碗蒸し
散髪も早目早目に甲斐性もの

倉敷市

小野克枝

長病みの床で作ってみる拳
幸福の駅へむかっている夜汽車
誤算ではなかった丸い瞳が笑う
他人様に上げる娘を叱りつけ
風向きを確かめ合って二人の歩

高槻市

若柳潮花

萩の花もう踏むほどに散りこぼれ
秋風に鳴る風鈴は淋しいね
リハビリで踏む自転車は倒れない
通院へ趣味とは別な友が出来る
手造りで食べてもらえる友が来る

尼崎市

黒川紫香

麩を追うた鯉の波紋が重なりぬ
有珠山噴火一と月前に踏みし土
老人の仲間のしるし市から来る

赤とんぼ動くなファインダーから頼む
雨欲しい蛙と一緒に見てる雲

倉敷市

水粉千翁

又来ますそんな笑顔を置き忘れ
任されて声なき声と語り合い
日々新た余生を訪うて風の音
白旗をいつでも出せる夫婦仲
生き抜いて汗にまみれたとは云わず

大阪市

室谷徹舟

一徹が自然の涼を待つ二階
布団まで打ち水したい熱帯夜
定年の一コマ芋の皮もむき
ジーパンが和服になって会釈する
負けて勝つゆとりが言葉選っている

倉敷市

稲田豊作

忍従に慣れた居心地とは哀し
ぬかるみの果てるともなき道と知る
いつからか軍師となった妻の目よ
結局はゴネ得側へ皆廻り
十五回胃カメラ嚥んでよく食べる

米子市

八木千代

回り灯籠ひとつの絵だけ忘れぬ
回転数替えると呪文めくロック
長旅の想いを海に告げる川
ワンマンの弱味老妻だけが知り

蟬しぐれ亡母恋いの鈴鳴り止まず

和歌山市 野村 太茂津

西山幸川柳塔賞受賞

歎びをどう伝えよう身を忘れ
花見事咲かせて土を賞めてやり
うれしくて痛くて弟子の太刀賞める
来年の土を育てて花の夢
友の忌へ百花斉唱して濁れず

鳥取市 両川 洋々

俺にも主張あるからピラを突き返す
読めぬからいっそカルテを不安がり
終戦も暑い日だった義手疼く
親友のひとり失う嘘を吐く
強情の妥協 黙って旗を振る

松江市 小林 孤呂二

花をきる花の心になってから
酔うほどに宴の花は忘れられ
したたかな風で逆う非をさとる
悲しむでなく一人の死者へ酒を酌む
市政記者ABCのDばかり

松江市 柳 楽鶴丸

フルコースマナーでたべると味がない
ハウス探培花の涙をご存じか
ハンディーをカバーしている娘の笑顔
園児の絵つなげば童話の国になり

夫婦円満一とサジの塩加減

八尾市 高橋 夕花

ふる里も母も知らない花の種
かなしい日も花は微笑まねばならぬ
三面鏡息子の物が増えていた
禁断のりんご目映ゆくてのひらに
車より夫の好きな定期券

松原市 谷垣 史好

何もかもあげた男の絵そらごと
恋は実らず積立は満期
お日様が昇ると世間しらじらし
目の前で裂いたうなぎを食べている
こまごまと母だけ分る雑記帳

東広島市 高橋 鬼焼

未来図へ農夫の汗がさびしくて
鉛筆をなめると嘘が書けるかな
時計巻く妻と明日を信じねば
ちびた靴父に明日の職がない
四季のない部屋で造花のひとり言

竹原市 小島 蘭幸

本を読む早さも秋の風となる
山の絵をじっと見ている郷愁か
怒っても靴がきれいに磨いてある
エプロンの妻にロックのリズム合う
僕のリズム妻のリズムの日曜日

新宮市 大矢 十郎

実印へ妻も覚悟の正座する
働いて返すといやな頼みよう
クーラーをつけ名月の窓を閉め
倒産の品はケースの値で買われ
見た通り言えば傷つく人がいる

東大阪市 竹 中 肖 二

渚で拾うサンゴの命思いつつ
耳痛い話へ隅で小さく居る
日暮しの故郷の山が削られる
出張の口実で居るゴルフ場
大物へ蟻は仲間を呼んで来る

東大阪市 竹 中 綾 女

月見草中洲に咲いて河平和
捨て猫が飼ってほしいと媚びてくる
萩咲いて残りの蝶の飛び交す
敬老日電話で子の声聞いて足る
鈍行でメルヘンさがす旅に出る

竹原市 三 宅 不 朽

若かりし亡父の字太鼓打つごとし
アルバムの駿馬しぐるる不惑かな
夕顔にゆかりの痛み今日も咲き
おろろんばいおろろんばいと老い給う
風情の一塊でよし野の仏

島根県 堀 江 正 朗

虫の声茶碗ふたつにお茶ついで
耳遠くなって愛情疑われ
横断路白杖汗の手に握り
倅せななかで重ねる老いの愚痴
白杖で叩けば道も秋の音

島根県 堀 江 芳 子

これからも願います真珠婚
心臓が素直に動く素直な日
老化とはこうゆうものか早く寝て
大切に生きねばならぬ巡り会い
炊事するほうが気楽な孫の守り

岡山県 嘉 数 千代香

寝返りを打てば子の距離遠くなる
秋晴れの碧が憂いを吸うてくれ
鏡台へきょうのドラマを聞いてみる
しあわせを私の器に盛ってみる
わたくしを引きずっていく陽が沈む

富田林市 板 尾 岳 人

水豊か憎しみ洗う鬼の面
山に棲む水は豊かに鬼を飼う
道連れに鬼と歩けば赤くなる
金剛の水をうぶ湯にしたくなる
山葡萄食えずに鬼は水を飲む
食欲の秋 老犬もよく食べる

大阪市 大 坂 形 水

ツラウンドの咎め齡をも考えず
エレベーターの中 外人は愛想良い
同業の噂 場違い筋で聞く
倒産社前から噂立っていた

大阪市

不二田 一三夫

小づかいが切れると時計まで止まり
頼みもせぬに身の上かされる

海のハイエナか北の監視船

空気吸っても水を飲んでも肥える質
ばくの机より上等なのが捨ててある

西宮市

藤村 ベ 女

運命のいたずらに勝ち今日の倅

一生を子に賭け回る寡婦の独楽

やきもちがきれいに見える年となり

竹とんぼ昔の智恵を孫にかし

米子市

小西 雄々

失業保険もらいに行くにも眉を引き

追憶はその人まかせの走馬燈

再婚のお礼も出雲の神に告げ

全快の苦勞へ災のあとも見せ

大田市

藤田 軒太楼

溶け込めぬなにかがよぎる疎外感

褒めてやる言葉探すに骨が折れ

亡母ねむる墓地を清めて秋を告げ

参観日教育ママの顔で出る

寝屋川市 宮尾 あいき

泣きに来て夫の迎えを待ち兼ねる

白浜にて

テトラポッド男波女波の邪魔をする

海の見える浴場人魚になっている

こうろぎのねぐら気になる俄雨

神戸市 小浜 牧人

父の背を流すがごとく墓洗う

バンザイで別れた心の絵は消えず

呼吸の合った二人に言葉はなくてよい

鳴くがいのちの蟬に生まれて啞蟬よ

神戸市 仲 どんたく

夜光虫くだいて渚の夜の素足

親分を不浄の金で供養する

幸福なねむりは新婦の肩へより

奉公袋焼き捨てた日が又めぐり

大阪市 津守 柳 信

恍惚の笑顔にはっとする夜更け

時計までとまりはせぬか盆やすみ

玉音が心の支えとкаした日

妻よりも男同士にある歴史

島根県 錦 織 文子

ため息もロマンも抱いて夢二展

いちばん星すんで掃除機廻り出し

出漁の港へ祈りが込めてある
二人だけ泳ぐ若さの海がある

諫早市

原田明春

移動期へ先任さんは落ち付けず
水見廻りお百姓さえも自家用車
子の宿題親父はやっと認められ
過疎淋し犬が宿借る無人駅

倉敷市

藤井春日

キッチンへ手引を置いた割烹着
二日酔昨夜の小骨がまだ刺ささり
晩酌で今日の日課を締めくくり
自慢では無いが質屋へ顔が効き

出雲市

原独仙

節くれた指が器用に秋へ蔭く
嘘に嘘継いで伝説連綿と
残照に慰められて明日を期す
財成して守銭奴と言う名を遂げし

伊丹市

樫谷漫柳

皺の手はジャンケン仲間にしてくれず
きつい目の鼻緒で行き度いとこがある
子の肩におんぶされたい時があり
戦後未だ鱈の干物に残ってる

豊中市

戸田古方

凝り性の夫にまかす小旅行
誰かさんが仰言ってから騒ぎ出し

手がとどきすぎて夫はいやがられ
触れた手をほどかず踊る踊りの輪

藤井寺市

児島与呂志

孫の目がぼちぼち俺を遠ざける
砂を這う蟻が太陽はねのける
新聞を読む気の妻は眼鏡かけ
下り坂車輪は軽くころがりぬ

東大阪市

斎藤三十四

清水の舞台で飛降りのまねをする
道行の舞台は紙吹雪散る
縦縞の模様で細身に見せてくる
スリッパの轍検証見逃さず

大阪市

本多柳志

踏まれても踏まれても月はロマンを失わず
ふるさとの記事へ目鏡をかけ更える
戦陣訓社訓の中に生き残り
時刻表乗り換え三分そば二分

鳥取市

河村日満

子より孫より妻が大事を病妻にいう
妻に感謝がこんな素直に言える日も
進行の順序狂わす時刻表
しんしんと花火のあとにある世界

東京都

山根白星

ネクタイで締め閉じ込めるビルの檻
犯人は眠むれぬ筈の星が降る

まかりまちがえた一本道である
風さつと話し忘れを思いだす

島根県 大森孝華

友情の傘にすがって雨やどり
新盆よ過去の詩あり走馬燈
夏バテの残暑へ義理の靴をはく
若い気へどうにもならぬ赤信号

大阪府 本間満津子

まごころへお礼の品は見付からず
ライバルと称ふには貴女やさしすぎ
銀髪のすすきのかんざし赤とんぼ
台風が風鈴のおしやべりやめさせる

今治市 長野文庫

しくじりを面白がっている他人
結果だけ見て成長がほめられる
女の冒険男のような服を着る
観光と結んで神様かざりたて

守口市 羽原静歩

赤潮と二百海里の中に生き
アトリエの裸婦は哀しい過去を抱く
ピンボケの写真を笑う子沢山
生かされて生きるいのちの朝ぼらけ

倉敷市 野田素身郎

ほめ方が下手でいまだに係長
子守唄母には母の節がある

車椅子時雨を避けるすべがない
先見えてきて討論に加わらず

倉敷市 田垣方大

石蹴って蹴られた石も不満なり
風雪に耐えた岩にも刻む皺
石仏にお供えがあり村平和
悲しみを肌に感じた百度石

富田林市 岩田美代

能のない主婦となりにし蠅叩き
運命が見えすいている秋の虫
首落ちに仏のうなじに秋が乗る
言葉染しんでいるコーヒが二つ

青森市 工藤甲吉

もう一本もう一本と敬老日
世の中へ出て卑らしいものを見る
真っ直ぐなきゅうりは何か親しめず
ケチンポでないのがケチンポから生まれ

桜井市 岩本雀踊子

秘密持つ鍵には鈴をつけぬ妻
よそ事でよかった夜の受話機置く
出来すぎた女で好きになり切れず
平凡な女になれと嫁がせる

大阪市 西出一栄

陽やけの胸を誇張するかに少女来る
ひまわりの黄を揺れ残し秋の風

コスモスの風遊ばして揺れている
あれこれと夜長へ年忌ふと浮かび

竹原市

時 広 一 路

嘘一つ一つ重ねて鳴らぬ鈴
台本をとちった方が喜ばれ
地図にない道で嬉しい花畑
妻に味聞かれてからの誉め言葉

鳥取県

林 露 杖

駅ラッシュ職安へ行く足重く
海棠の花芯覗けば秋匂う
一年の空白算盤玉が倒け
出来心別の自分に見詰められ

米子市

石 垣 花 子

半信半疑訃報の受話器持ったまま
毒舌も笑顔で応じる小あきんど
物腰に過去のくらしをのぞかせる

竹原市

山 内 静 水

皆んなして決めて何んとかなるお金
すぐ泣いて笑うて老いし姉妹
ご指名に司会者だけがした拍手
逝く先きも解らず年寄り死にたがり

倉敷市

小 幡 里 風

証文の余白へきつい但し書き
「すみません」その一言で足りがつき

盗見るカーブミラーに遠い人
アカンベーそんな仕草で断わられ

和歌山市

若 宮 武 雄

丸すぎて思うところへ落ちつけず
やりくりのパズルを解いた夫婦仲
それぞれに明暗うつる窓あかり
三分ほど隠して月のいいポーズ

泉大津市

村 上 春 巳

夏バテが五尺の身体にまだ果喰い
俺だけの世界に浸るコップ酒
森繁に銀座の雀のよき時代
台風がそれてテレビで笑いこけ

米子市

増 田 竹 馬

肋骨の奥の嵐に耐える夜半
新療法主治医へ白紙委任状
五つ子の個性老師の手を拒み
デノミOK物もお金も無い暮し

兵庫県

河 原 みのる

秋空へ飛ばす気長なメッセージ
風鈴音害まだ殺人とまでゆかず
朝顔からみれば人間尚はかな
極楽ももっと宣伝したらどう

平田市

久 家 代 仕 男

一日のリズム節目にお茶を淹れ
櫛の目の抜けた並木へのぼる月

アイシャドー暗い谷間の過去を秘め
犬嫌い犬も嫌いな顔で吠え

生活力旺盛妻の太い指

花時計アベックも花も実を結び
噂拾って女落ち着き取りもどし
遺書書いておくほど残す物が無い

やけ酒を飲む倅せがある負けいくさ

無難作な顔だが妻を愛し抜く
あいつまで極楽願うから慌て
麦藁帽一つ残して涙は秋

待ちばけの女に狂う花時計
お別れも華やかにする月夜
待ちばけの口から洩れる火の言葉

極楽の風吹く部屋に貴族住む

衣替えうっかり財布忘れて来
廻り廻ってやっと故郷へ腰をすえ
電話ベル会社からなら留守と言え

駅前のパチンコ店で乗り遅れ

美禰市 安平次 弘道

八尾市 大路 美幸

八尾市 宮西 弥生

柳井市 弘津 柳慶

堺市 藤井 一二三

食欲の秋うらめしく今日も粥
心斎橋に来て恋人の足になり
老妻の愚痴いまだに仲人口を悔い

生あくび何とかなるさと横になり

望郷の臉に泳いだ川涸れず
つぎはぎの心繕い十字切る
墮落女の面影に似る羽抜鶏

指立てて妻の機嫌を子が告げる
それぞれの酔ぐせ幹事心得る
神前を素通りしてるピクニック

車も買いた家も建てたがまだ独り

爽やかに明治のままなる送り火よ
祝膳服に着られている美人
山越え野越え夢に姿をたどるのみ

門へ胸のチャイムが鳴る日なり

看護婦の制帽理性を強くする
俺の家谷間に置いてビルが建つ
回るとこ回ってクーポンの旅終る

双生児と診断予算建てなおす

岡山県 出原 敬一

枚方市 宮川 珠笑

富田林市 和田 維久子

鳥取市 小林 由多香

松江市 岡崎 祥月

胃を病む(二句)
閨病の目に秋風のガラス越し

年金のくらし隙間を抜ける風

眠れない夜の頭の走馬燈

なるようになるさと思う日の空虚

岡山県 竹内翁 童

思いきりどなつてみたいボーナス日

倅せは一坪農家の収穫期

日本の味覚をこわすコマージュル

何もないはずの我が家に鍵をかけ

京都府 都倉求 芽

身に覚えあるからムキになつて来ず

寝とほけてはてなと見回す旅の宿

石落してつり橋の高さ確かめる

はずされる階段と知らずかけ上り

竹原市 鈴木 かつ子

疑うて罪の深さを知るざんげ

嫌われて嫌って距離を遠くする

濃く淡く霧は心のままになり

低姿勢これも限度の意地があり

豊中市 安藤 寿美子

人間をやめれば風になれそうで

しのび寄る秋に指先ふれてみる

月下美人見せたい人は皆お留守

末席のコーヒ―茶碗欠けている

大阪市 黒田 真 砂

秋芳洞

歳月の深さ思い知る秋芳洞

指月城

小雨降る指月城跡のたたずまい

まだ欲があつて派手目を買うとする

検診を待つ間広がる悪い夢

鳥取市 佐々木 静 泉

新風を吹き込む強気をうとまれる

晩酌をたまには妻に酌いで欲し

大ジョッキきょうとあしたをつなぐなり

自販機に百円ちらりと不信がり

今治市 越智 一 水

僕の白髪母があわれに言うてくれ

八・十五あなたの分まで生きのびる

つゆの花 影でひっそり愛をもち

うれしさはかくしきれない足の音

藤井寺市 西 いわを

陽炎となつて魂きえるかな

盆栽へお早ようさんと声をかけ

病み上りおいおい酒に親しもう

椋鳥の群がり帰るうろこ雲

大阪市 柳 原 静 香

不況風何処を吹くのか海の宿

紅をはく夫婦の虹が消えそうで

スランプを抜けだす智恵を借りにゆく

もの言わぬものの哀しさ身に染みて

父・八十七歳の生涯を閉す

米子市 林 瑞枝

尊敬の父の遺髪を秘めて持ち
死に花が咲いて寝顔の美しき

浄土への道は呼べども振り向かず

香ゆらぐお父さま娘だった涙拭く

大阪市 那 須 鎮 彦

同色に溶けて二人は丸く古い

普段着の老母の言葉は身にしみる

ある日ふと善意の言葉思い出す

へらず口きき乍ら妻酌をする

大阪市 江 城 修 史

絵に書いた倅せ実らぬ夢を追ひ

身構える暮しに妻の座が光る

ふり向けば足跡さえもないきのう

ああ初老素直になれぬ日が憎い

下関市 国 弘 半休門

ライオンの昼寝毛皮を乾す如く

年寄りの勘は鈍いが頼もしい

調法にされて便利屋酷使され

停電に困る暮しの台所

仙台市 川 村 映 輝

気の強い分だけ責任重くなり

甘く見た山で危く助けられ

年金に孫と連れ立つ嬉しい日

さよならは小さいなみぞれ無人駅

海に散る雪は声なき子守唄

保険証書死と引きかえの遠い約束

貝塚市 行 天 千 代

老の意固地自炊を止めず

眠むられぬ夜をアルバム整理する

青春の全部を賭けた球を追ひ

姫路市 梅 谿 庵 不 醉

矢印を辿れば悲し君の旅

一周忌何処まで行たかお経読む

黙秘権開けば君もボロが出る

岡山県 直 原 七 面 山

金を使わぬ順に落選

値切り上手な妻に吃驚

職持つ妻の若き出で立ち

橿原市 岩 井 本 蔭 棒

明治まだあの日の神話を信じてる

ライバルのミスへ顔色覗かれる

敬老日選んだ悲運を泣いてやり

東大阪市 落 合 思 月

保護色を着ない善人だから好き

一人旅降っても晴れてもつまらない

LLの妻が素直に良く動き

姫路市 大 原 葉 香

身障児蟬の世界も啞がおり
舞い戻る下界へ重き登山靴
底辺の苦勞を知らぬピラミッド

和歌山市

小川 佐知子

囁きが女の意地を狂わせる
傷心の過去のページは白いまま
炊事する手へ訪れた小さな秋

米子市

佐伯 越子

ニコヨンに詩情も湧かない雨が降り
母の待つ土橋もおぼろ山の里
忘れたい過去がいつまでつきまとい

大阪市

山川 阿茶

プロ野球マジックが出て秋の風
俗世間へ横むくことをくり返し
美談など三面からは放り出され

堺市

高橋 千万子

三十三回忌面影知らぬまま拝む
おじぞうさん少し酔ってる紅ちようちん
時計はずしてさてこれからがわが時間

和泉市

西岡 洛醉

老婆の湯上り女見つけたり
負け犬に成って明日へ満を持す
夕焼けの赤に今日あり明日があり

宝塚市

小畠 無聖

口裂けし柘榴の齒なみ魔女笑う

月無情今宵の影はわれ一つ
生き残る命ひとつの離れ雛

大阪市

神夏磯 道子

子がくれた玉手箱なら信じたい
言い勝ってもう抜け道のないを知り
蝶になるまでの辛抱蛾は堪えて

守口市

野呂 右近

合掌の時だけ邪心抜けて居た
運の字が努力不足の助け舟
忍耐が身につき嫁の座ゆるがない

大阪市

天正 千梢

四恩につつまれ船出する二人
明日の重さ二人で背おう幸
はばたきを休め小さい城しずか

大阪市

中川 滋雀

浮御堂濁れた水面が画にならず
すらすらと書けば筆ペンですか
満願へ心の旅にある菩薩

鳥取県

鈴木 村諷子

農民の抵抗なんかたかが知れ
八瀬大原イメージよりも年を取り
つじつまを合わす構想ねりにねり

岡山市

時末 一灯

終点と決めてた齡を折返し
理不尽も病人というかくれ糞

孫がくる三日を西瓜冷えに冷え

島根県

榎原秀子

平和への願いとどかぬ核実験

清流の岩魚へ釣糸飽きもせず

初栗の御飯で夫の誕生日

大阪府

河井庸佑

きょう一日わが人生をふり返える

一日の軌跡をたどる日記帳

お互いに愚痴を聞き合う友がある

和歌山市

内芝としよ

独り者隣の時計で眼を醒ます

逆らわず自分の使命に生きる河

末席で義理をすませてそつと去に

大阪府

神田秀峰

うちの子に限って教育ママの愚痴

もう一度会いたい人とすれ違い

黒髪の香り隣の娘がもたれ

松原市

玉置重人

肚割った情が泌みる河内弁

矢印がここでちぎれた定年譜

吊革につかまる幸を逃がすまい

兵庫県

大江秋月

吸いすぎに注意と書いて売る商魂

同じ箱同じ席へと通勤者

消灯ラッパ鳴らぬ旅館の午前二時

生駒市 草深醉升

口答え黙って聞いている気の弱り

秋風の間に間に哀れ残り蟬

又しても問わず語りで得意顔

鳥取市

大塚豊生

万歩計亡父の生きてる音がする

結局は非力の夫の力借る

スランプのない勤労を感謝する

京都市

山本規風

本もののゆとりでないと見破られ

恍惚が二千万円やると云う

皆圓るうなつて荒波迎う石

大和郡山市

森田カズエ

お名残りを惜しむ舞台の投げキッス

欲ばりへ童話の犬が吠えたてる

紹介状医者念入りに封閉じる

兵庫県

遠山可住

新しいモラルを明治からみつけ

知らぬ者どうして満員の孤独

孫たちよ集れ過疎という広場

玉野市

小谷仙山

彼岸花住宅難が削り取る

早掘りの一坪園のいもの味

ショッピング予算はるかに越している

大阪市

西川誓二

ささやかな極楽親子水入らず
ベターからベストへ夢を実らせる
第二の人生も山高く谷深し

唐津市 新岡 回天子

本堂の再建中味はアルミとセメン建
新入社美人はみんなよその課に
コップ酒内緒でやる店うまい酒

西宮市 若林 草右

飛騨高山

お白洲は座りにくそな石の庭
山菜のメニューは筆の手漉紙
おめあてはお下りという地藏盆

大阪市 横地 雅風

鈴虫の奏でにテレビの音を切り
嬉しきは仕上げの服に袖通し
老いせめて新居にローンが振り向かず

大阪市 西森 花村

嘘のない顔孫とおじいちゃん
もつれそなヒモのスリルよ女の眼
敬老の日ゴールが近いと言いたそう

大阪市 藤田 頂留子

パトカーが去れば何時もの国道に
ゆずりあいすぎて街角三すくみ
パントマイム公衆電話のガラス越し

岸和田市 福浦 勝晴

健康をひっさげて行く同窓会
乱世相ぼやいて独り焼く秋刀魚
老境へ邪欲を捨てて活ける菊

倉敷市 松井 俊風

秋晴れの深さを鏡知っており
人生も終り間近い日向ぼこ

浜田 久米雄

包丁を磨いで妻にはだまっとり
腹にあることを一級酒が言わせ
祝われる古稀なるほどと指を折り
年寄りのまだまだ歩く杖があり
おしやべりが変な噂の輪を揚げ

本田 恵二郎

大黒柱しかとゆずって余生満ち
五臓六腑洗うて来るよとドック入り
重責をぶらず気取らずなし遂げる
札束の真中に釣針をはさみ
或る決意せつせと何か焼いている

正本 水客

北の海から

最北の岬に人間の営みがつきる
島へ行く船はテープもないままに
エビ漁の三角の帆にある白い夢
朝の海さわいで空の色と競いあう
昆布の黒帯しめる女神を海に見る

お互に眼鏡探がして老夫婦
孫のピアノへ今鈴虫も合奏す
鬭争もストライキもない小鳥たち
雑音が入らぬと勉強出来ぬ孫
四十年前の従軍日記見る

追伸になって本音に筆の冴え
唇嚙んで子供は私が育てます
慌てた蟹がしばらく真すぐに歩く
人は善好んで遅刻などしない
人間になりたくて一行追加する

陽が昇る昨日の顔を作るまい
ひがみではないと老いの自己弁護
貸付がやっとうなずき酌きこぼし
何とまあ素直なるかな洗濯機
政界のやっさもっさへハイジャック

義兄さんの眉目たのもしャンデリア
嫂さんとおれば春風吹く対話
姉ちゃんに云いつけてやるおちよぽ口
乗ってすぐリフトの顔は笑わない
行き違うリフトの顔は童話めき

小西無鬼

菊沢小松園

川村好郎

西尾棗

母一人子一人秋の灯を分ち
綾とりの綾も亡びへ向うなり
志衰えて書く立志伝
月下美人 王昭君が咽喉見せる
月下美人 人間界の常闇に

凡愚たり主治医の言に一喜一憂
晴耕雨読雑用が多過ぎる
ヒビ茶碗そつと抱くよに今日も生き
片肺で生きる人あり頑張ろう
視野広く思索は深く老いを生く

安楽死志向誰方も異議がなし
宿直の日誌に一句読むゆとり
どの役もこなす総理で物足りず
泣き面に蜂を逆なでする資本
秒読みの行政またも骨を抜く

自画像のデッサンまるい線が出ず
台風が来るのに虫は鳴きやまぬ
なめられる警察激流にあえぐ葦
まかり通る無法も育つ民主主義
ごねどくが最短距離を示す国

橘高薫風

若本多久志

伊藤茶仏

尼緑之助

川柳塔社

役

員

名

簿

主幹・理事長

副主幹・副理事長

副理事長

常任理事

児黒菊河川河金小大岩板阿阿	橘正菊川若	西	中
島川田内口井井浜坂本尾萬部	高本沢村本	尾	島
与紫い天弘庸文牧形雀岳萬柳	薰水小好多久	葉	生々庵
志呂さむ笑生佑秋人水子人の太	風客園郎志		

参

事

小小国工河川奥白岡岡伊市尼	若吉本不野西西戸竹高傍島
西西弘藤村竹谷井村崎藤場	柳田多田村田 田中杉島居
雄無半甲日松弘三久祥茶没緑	潮圭柳一太柳い古肖鬼静百
々鬼門吉満風朗坊良月仏子助	花堂志夫津子を方二遊馬酒

理

事

加嘉座笠香小小越大江植植有	渡山八宮水本藤弘浜浜新長中月高田清直小
藤数谷原川幡野智矢城山村信	辺内木口粉田井津野田岡野筋原橋垣水原林
貞千漫吸醉里克一十修武客新	曉静摩笛千恵明柳奇久回文三宵操方一七由
山香柳江々風枝水郎史助子助	童水郎生翁朗朗慶童雄子庫幸明子大保山香

吉横山山山村三村松藤藤藤藤福原	梅野西中中中仲遠天辻辻玉谷新塩岸神
岡山本根川田井上川村田岡井井浦	庵田出村川川 山正 置垣谷満 谷
美一素白阿瓢醉春杜々軒花一春勝独不素一ゆ晃滋どん可千白圭重史笑 南凡	房声郎星茶太夢已の女楼梢三日晴仙醉郎榮を男雀く住梢子水人好痴敏柳郎

編集部

句会部

小 山不戸谷高児河小橘河河香板有	西西中玉高城塩児河金小江板
谷・本田田垣杉島野出高内井川尾信	田川川置杉 満島内井川城尾
葉 素一古史鬼与君智薰天庸醉岳新之	柳誓滋重鬼一 与天文恒修岳
子 郎夫方好遊志子子風笑佑々人助	宏子二雀人遊舟敏志笑秋明史人

絵筆と針

東野大八

私はガキの頃は、長ずれば画家になろうと決心していた。画にかけては、クラス中は勿論、学校中の誰にもヒケをとらなかつた。もちろん、こんなに偉張るのも、それ相応の実績があつたからである。

まず、小学校二年生のときに県展に入賞したのをきっかけに、連続四年間、県展の金賞のいずれかにありつた。その極め付は、小学六年生のとき、晴れの天覧の栄に輝いた事である。全校生徒の居並ぶなかで、校長先生から金ピカの表彰状を受けとつた。文部大臣三士忠蔵の名の入つたその厚紙を、親父は金の額ぶちに入れて玄関に飾つた。

しかし、私の家は貧しかった。小学五年生のとき、事業に失敗して土地・家作のすべてを失つた。家中、白い差押えの紙切れがピラ

ピラしている中で、親父は大胡坐をかいてやけ酒のみ、小さい丸髪を頭にのつけたおふくろは呆然と長火鉢に頬杖をついたままだつた。米の一升買いと、酒の量り売りの使いの役目がその日から私の日課となつた。

そうしたエンピツ一本、ノート一冊も買えない家計の苦しさを、私は近くの県立女学校の塵捨場で補つた。そこに捨てられた文房具類の使い捨てたものを拾うわけだ。だから、私のエンピツはチビくればかりだし、ノートはタテ野、ヨコ野の雑多のものを針金でとじたものを使った。絵具はべちゃんこの水彩絵具の拔殻ばかり。ボール箱にいっぱいになつたまるで錫（すず）屑の様な山の中から、私は僅かに残つた絵具をしぼり出し、ハラを割いては絵筆をふるつた。その筆も、拾つたわ

ずかに毛の残つた代物ばかり。県展入選も、天覧の絵も実は、この絵具から生れた。

森永キャラメルや、蜂ブドー酒の図案募集の入選作も私の手から生れた。絵具がないので黒い紙を切り抜いて使つた異色さがかわれたのだが、その賞金はすべて親父に巻き上げられた。しかし、親孝行？な私は、大人にまじつても入選できた自分の作品に自信と誇りを深めた。

フランス帰りの新進画家として当時有名な中野和高という画家が私の町にいた。東京で模写事件を起し、その騒ぎを脱れて田舎にちつ居した人物である。その人が、県展で私の絵をみて、学校に私を訪ねてきて、おれのところへ修業に来いといったが、私の家の暮し向きを知つてそれつ切りになつた。いま思えば、家が貧乏だからよかつたのである。

時に大正は昭和に改つた。学校では御大典で京都の御所拝観旅行が企てられ、月五十銭の月掛け貯金をはじめた。私のいる学校の六年生はA組とB組にわかれ、A組は中学進級の児童ばかりが集められていた。上の学校へ行きたくても行けない私だったが、A組に私は編入されていた。あたりは進学する連中ばかりだから良家のものが多く、月掛貯金は当然のことのように、わいわい、持ちよつてゐる。その仲間外れは私一人だけである。さ

わらぬ態を装っていたものの、ハラの中はこども心だけに、煮えくりかえる程の口惜しさだ。

そんな私に、ある日少年倶楽部の宣伝用の小雑誌が学校中にばらまかれた。何気なくそれを眺めていると、小学生の作品募集の欄が眼についた。一等十円、入選三名とある。

「よし、こいつだ」

と私はけんこん一てきの勝負をかけた。そしてそれが見事に適中した。同級生の月がけ金六円をオーバーすること金四円也。その金銭を射止めて一等喜んでくれたのがおふくろだった。御所拝観の晴れの出発の前日、金ボタシの制服を私の眼の前において言った。

「修学旅行にいけないことで一番口惜しかったのが私だよ。さあ、これを着て、元気でいっておいで」

私はその生れてはじめての金ピカの制服の着心地が今もって忘れられない。岡田三郎助の立派な挿絵の中に、可愛く描かれた主人公の私のついた、少年倶楽部の小雑誌が学校中に溢れ、私は一躍、学校中の寵児になった。私が画から文筆の道に入るキッカケとなった動機は、まさにこの時にあったというわけだ。老境のいま、心静かに回顧すれば、マスコミの息の長い歳月の人生を思うとき、人間の運命なんてものは——という感慨がおのず

と頭をもたげるのも成行きである。

敗戦直後、汚い軍服の片袖をフ拉里とぶら下げた、尾羽打枯らしたわが子の姿に、思わず母親としての屈辱に号泣した気の強い母は、そうした後の一日、しみじみとこういつたことである。

「お前にはまだ右腕がある。字の書ける右腕が。これもホトケ様のおぼし召したが、やっぱし、あの御所拝見の十円やなあ」

あのときの十円の感銘はまだ生きていた。「実はおれは、こどものときから絵描きさんになろうと思っていたんだ」

若いときから、ひたすら賃縫いの仕立物一本で通し、私たち兄妹四人の面倒をみてきたおふくろは、そのときもせっせと針を運びつけていたが、その私の言葉に莞爾と笑い

「わかってたよ、わかっていたけど話してもきいてくれるおやじさんじゃあなかった。

いまだからいうが、お前が天皇様の天覧になった絵のついた本、ごついマクラになるような立派な画集ね、あれを買ったのは私よ。家は貧乏でも、こんな立派なことをしたあんたがうちにいることを、家の自慢にしたかったからだ。五円というお金は、それやあ辛かったよ、貧乏のどん底やったから……」

そうむかしはなしをしながら、おふくろはそのあと小さなふくみ笑いをした。

「おやじさんたらねえ、その本をしばらく置いてから質屋へ持っていったんよ。五円の本やから二円ぐらいにはなるじやろうと思うてな。そんなことをいうて相手は貸すもんかいな。見事断られて、ふくれ面をしてかえってきたということはええよ、あいつを絵描きにしたろうと思うたがやめた」

おふくろと私はその話のところで思わず顔を見合せて笑った。おやじさんも心の中でのんなことを考えていたことが、おふくろにとっては何よりもうれしかったらしい。

「ええか、腕一本でこれからも辛いやろうが、嫁はんも岐阜に待っていることやからお前もがんばりや。私もこれ一本で生きてきたんやから、これから死ぬまでがんばる……」

おふくろはそういって、右手を高く私の眼の前にかかげた。そこには、一本の針がキラリと光って、秋の陽をはじいていた。女のつらい一生をささえた、それは「針一本」であったことを示している。私にはその針が、稼業の「筆一本」にみえた。痛い程の一瞬だった。

つい、こんな妙な一文をかいてしまったのも、この秋風の十月に母の十七年忌がきたからだ。

誹風柳多留廿五篇研究

— (十六丁) —



岡田 甫

入江 清 博 勇・紀 内 恒 久・鈴木 黄
八木 敬一・西原 迷 朗・室山 三 柳
亮・岡田 甫

287 とんだ花火をうれしがるおそろしさ

入江一周の幽王の愛した異常女褒似の故事。

この女いかに手を尽しても笑顔を見せぬ。そこで烽火をあげたら諸侯の騒ぐ様子がおもしろいとはじめて笑った。その後サーピスにしばしば烽火をあげたが、ついには人の信じるところとならず、ために周は衰えたという花火見るたび御妾ハ笑う也

笑はせた王末代のわらひもの

一三・三

岡田一賛。

288 勘右衛門よしをからして駕をたて

入江—吉原の開祖庄司甚右エ門。「勘」とし

たのは、作者のうろ覚えか誤刻か。「駕」も吉原の異称で「籠」の当字であろう。

女郎屋が立ちますと葦刈っている

安五・仁三

八木—「勘」は誤刻ではありません「御府内備考」をはじめ、幾つかの本で勘右エ門を使っています。「甚」が多いのはもちろんです

が。青木一賛。「勘右エ門」先行吟に、

いい場所を見立テ勘右エ門よしをかり

天元・義二

『江戸惣鹿子名所大全』には、「慶長十年の頃にや、柳町ハ御用地になり、今元誓願寺前と云辺へうつる。其ころ小田原の庄司勘右エ門後、甚右エ門と改む。此者願を申上元和三

289 すまんまをたべさせ候と里へふみ
清—「すまんま」とは、御菜なしの飯ばかり。嫁に飯だけを食べさせているのであろうか。嫁はその状況を手紙に書いて実家に送りふんまんをぶちまける。
八木—同様意見であるが、次の二通りが考えられる。①礎稿のように、嫁に食べさせる。嫁いびりの一種。②嫁が家事不馴れの不手際

めて遊女町を建たり。其比此地葭原なりしを文字を書かへ繁昌を賀して吉原と改しとも、亦は庄司ハ駿州吉原の者にて、古郷の名を慕ひて付しとも云」とある。
岡田一同。

(十七丁)

から、亭主などに素飯を食べさせてしまった。
紀内―礎稿賛。四面楚歌の嫁としては、里が
唯一の寄りどころなのである。愚痴の文。
すりこ木でふちまいらせと里へ文

拾一・39

里へ文ぶたれまいらせ候と書キ

第三・11

こわ色でわれを叱って里でなき

明六・桜2

青木―礎稿賛。紀内氏表現面白し。

岡田―礎稿に賛。

290 藪いもの見舞張子の虎をやり

清―「藪いも」とは、所謂水疱瘡のこと。そ
の見舞いに玩具の張子の虎を持って行く。

八木―賛。

小児家ハとらの脉など取って見る

拾一〇・22

紀内―賛。「藪」と「虎」のきかせ。

西原―賛。「藪いも」は貞享頃は用いられず

「ヘイナイモ」といった。「享保二年刊行の

△合類節用△には、水痘にスキトウの字音を

附したる外、ミスイモ及びヤブイモ（慶安三

年十月四日の触書には藪イモと書きたり）の

名称を挙げたり」と、富士川博士の『日本疾

病史』にある。

室山―礎稿プラス紀内説賛。西原氏の文献で

証明ができた。

岡田―同。

291 尋佗いふくもぼろんじとかわり

清―二字目不明のため「佗」として考える。

「ぼろんじ（梵論字）」とは虚無僧の異称。

虚無僧があらちちらと徘徊（敵討ちのため

か）しているうちに、衣服もすつかりすりき

れてぼろぼろになってしまったという句。

「梵論字」と衣服がボロボロになってしま

ったことを掛けた句作。

青木―賛。

当世はぼろ／＼といふ形りでなし

七・19

室山―上五を「たづねわび」と読めば、礎稿

の仇討。

入江―「虚無僧」でなく、敵を長尋ねしてい

る「武士」が、ついに虚無僧となるのであ

る。虚無僧の説明は礎稿の説明に賛。

岡田―原本「尋佗」に間ちがいなし。解は礎

稿に賛。

292 軍に負てめがねをば鼻へかけ

清―よく分らないが、駄勞解を。

店先で、商人と客との間の値段の駆け引き

である。主人が客に負けて、値引きをし、

おもむろに上眼使いで客の顔を見る。

八木―よく分らないが一説を。大谷刑部吉

隆。関原の合戦で大谷は三成に反対したが、

遂に死を覚悟で謀議に加わる。彼はライ病で

あったため、顔が崩れていた。金吾中納言秀

秋の裏切により討死する。顔がくずれていた

のでめがねを鼻にかけたであろう、というう

がち。

青木―「軍に負て」が不明。「目はめがね

は入歯にてまにあへど」（三八・15）のいく

さかと思つたが不適。

西原―甚や将棋を見ていた人。それまでは、

「ヒタイ」に眼鏡をかけていたのだが、応援

していた方が負けたので、また鼻にかけて帳

面をつけた。

岡田―難解句。「軍に負けて」だから、甚や

将棋とは思えない。また合戦としても、大谷

刑部はすでに盲人だから、目鏡などかける筈

もなく、縁がない。とにかくこれを合戦の句

と見て駄勞解を述べれば、勝った敵軍は手柄

を鼻にかける。片や敗戦の老将は、合戦中は

はずしていた老眼鏡を取り出し、心淋しくそ

れを鼻にかける……とでもいうのか。

293 村ぶげん娘が逃て芝居じやみ

清―豚廻りの芝居がかかったが、その役者に

村分限の娘がぞっこまいて家出、役者と

かけ落ちをして村中大さわぎとなり芝居は中

止となる。「ぶげん（分限）」は金持ち、物

持ち。「じやみる」は、中途で中止になるこ

との俗語。

西原―賛。「じやみる」は『俚言集覧』に、

「事の成らんとして留り止むを云」。

室山―同。村分限が勧進元であったのだろ

う。

岡田―同。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

尼 緑之助

恋染し彼女は射程距離にあり

小西 雄々

文句なしの楽しさが、明るく、ほほえましい。他の短詩文芸では真似が出来ない。平凡ながらこんな作品は推奨されてよい。

光線はあくまだ八時十五分

高橋 鬼焼

『だ』で一度切り、時間を一気に吐く。どろどろの怒りを強調している。これは原爆体験者でなければ生まれないであろう。『あくま』は漢字がいいと思う。

燃えている魂ひとつ違ひに行く

小島 蘭幸

勿論妖怪の魂ではない。熱烈な思慕を表現して迫力がすばらしい。

満月が見ている安堵梅を干す

堀江 芳子

梅干作りの過程、塩漬けの梅を干すのには

夜露が片棒かつぐ。その翌日雨にでもなれば失敗だ。生活の智慧を受け注いだ主婦が、明日の晴天に心はずませながら、いそいそと庭に梅を扱っている姿は、月下の墨絵である。園児の絵つなげは嘶の国となり

柳楽 鶴丸

幼稚園児の絵には暗喩や寓喩があふれている。下手な前衛句より作為がないだけ、たのしくはね返って来る。描いた者が数人であれつなぎ合わせたら、確かにお嘶しの国が生れて来るだろう。純真な訴えが、ほほえましい夢を与えてくれる。

曲り角生きる心の文字を嘔む

大峠 可動

曲り角つい札束にけつまじき

小幡 里風

『曲り角』はよく見受ける句語、句意が広くうつり、作句上効果的、故に安易に使われ易い危惧感もある。前者は下五がやや生硬の難がないでもないが、ひたむきな自省にうたれる。後者は処世の戒しめというより、世相への強い諷刺と受け取る。

狂い咲くには 痛む足腰

渡辺 曉童

組み敷かれたので燃ゆる外なし

直原七面山

十四字詩形では佳作率（成功率）が低いように思う。字数がやはりものを言うようである。短詩の難かしきである。ともかく、両氏共呼吸長くこれに挑戦されている意欲には敬

意を表する次第。

前者は中年者の心情のうごめき、葛藤、これも生のがきでもあろうか、巧みなまとまりがよく、後者はポルノながら一つの真実追究として評価する。

落選のポスター公約まだ叫び

清水 一保

選挙後も残ったポスター批判の句は少くないが、こんな捉え方はおもしろい。気の毒でもあり、滑稽でもあり、腹も立つ。

鏡の隅にすこしロマンを残しとく

高橋 夕花

三面鏡どつち向いてもいやな鼻

鈴木かつ子

女性と鏡、それだけでもロマンがただよう。前者は、つつましやかな想いがひろがりを見せ、後者はユーモラス。何れも婦人ならではの作品である。

無題の絵残し女ふり向かず

川村 好郎

無題ながら立派な絵であろう。その絵の中の主人公が無言で消えて行った。高邁な格調は流石である。

その他の佳作

ブランコがたがいちがいに振れて昏れ

小砂 白汀

赤裸裸に書けばペン先尖り出す

河野 君子

その先に何があろうと川の水

川端 柳子

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

山本素郎

夕焼けに向つて帰る共稼ぎ

牛尾緑楼

ふたりには、充足した一日の疲労感が快い。ドミエの三等列車という絵がある。男が膝に箆を抱え、女は豊満な乳房に愛児を横たえている。裕福ではないが、健康的な生命力が息吹いている。なぜか、イメージがこれに重なるポエジだ。

夫唱婦随ちよいちよい夫の足を踏む

有働芳仙

おもしろいノの一語につきる。

夫の提唱、かならずしも万全でないから、柔順なはずの妻に往々にしてやられる。『そんなお金は出せませんよ。嫁にやったからには、もう、あちらさまの人ですもの』と、保守感覚の鋭さには夫も参る。

かといって、貸すつもりがないのに横から妻

の阿呆（ゆきを）というドジを踏むときもあるから、この夫婦、退屈しない。

外からは何処も平和な灯がこぼれ

岸本豊平次

—これさえ無ければ—

—これさえ有れば—

という問題は、どこか家庭にもあるもの。

本音を叩けば、いずれも、

『助けてくれ！』

と叫んでいる家並の灯だ。

背の温み追えば女になっている

松原寿子

古いが——お詣りに行くつてやと出て来たの（小次郎）という句が思い出された。

今のいままで、無邪気にまつわりついていた娘が、いつのまにやら、実の親にさえ用心深くなっている。そうさせた憎い相手は誰だろう。光陰の迅さも亦うらめしい。

四季の花妻にもんべのある限り

飯塚虎秋

尽くすだけ尽くしてくれるが、何も、僕から欲しがらぬ。無慾な妻、糟糠の妻。その倅せに馴れて随分久しい。

折々に満たしてくれる野花は、妻に、もつともふさわしい、草花もまた、妻を慕うて咲き競う。もんべの妻よ永遠なれ、さりげない中に、作者は、尊いものを見出された。さわやかな愛妻讃歌だ。

砂浜に狂える夜を埋めて去り

杉浦婦美子

ジュリエット

おお、わたしの心臓、裂けておしまい、あわれな破産者のこの心臓

今すぐ裂けておしまい！

死も、狂も、その極限においては得も言えぬ境地に至るという。

掲諦々々 波羅掲諦（いくいく、我は往く）が、それを意味するとの説も秘にある。

狂ったあとの解脫感も快いもののひとつ。月は、嫉妬深い女神だという。だから、静かに埋めて帰りましょう。凄い砂浜でした。

水差しに酒のおいする患者

柳原孝柳

へそ曲り今日は何も言わぬ酒

野田君枝

当人は、至極、真顔でとり澄ましている。とばけた味がいいですね。

嘘を待つ女へ白状して別れ

柚木踏草

男が去ったあとも、女だけが、いつまでも霧のベールに包まれて佇んでいた。

もう夢は捨てていまずと言う未練

崎山美子

演技とは知らず夫慌てたり

反抗もいいもの夫ふとんを敷いてくれ

北野久子

柳行李・書評

戸田古方

正直いつて書評を書くというのはむずかしい。また、これほどやさしいものはないともいえないこともない。

誰が見ても正しいという批評は凡人にできるものではない。それぞれ好みが違うからである。ただ、書評を書く人間のキャリアに読

む人が錯覚し、騙されているだけだ。やさしいといえど批評する者の好みの尽に選ぶとなれば、誰にだってできる。どうやら私の書評も後者になることを、著者静馬さん並びに、読者の皆様のお許しを得なければなるまい。

「柳行李」を読んで、チェックしたものが二二句、その内マルをつけたものが四句あった。そうした私の好みの句を私なりに句評しながら、この句集「柳行李」の読後感を書かせて頂くことにする。

マルをつけた句から、(一) 内句集の頁

①風船を持つ児へ舐よけてやり (六五)

②何よりも阿呆になれという見舞 (八二)

③禁酒して神にもお神酒まいらせず (九〇)

④二と三とこ桜がほかす山の青 (一一七)

④の「山の青」の句。薫風さんが短く、しかもいみじくも川柳的風景画といっておられる。静馬さんが絵を描かれるかどうかは知らぬが、この句には確かに絵心があり、文字で綴った大和絵である。決め手は「二と三とこ……ばかす」にあり、それと桜と山の青が憎いまで調和している非凡。

①の「風船」は静馬さんの善意の句。勘定ずくの人間には思ひも及ばない境地。二十八年の柳歴は長くないかもしれないが、静馬さんは川柳の善意をまるまる自分のものにしていられる。静馬さんがどんなに真剣に川柳に取り組んでこられたかを感じさせる句。

③川柳の常識である穿ちに徹したのが、この、「お神酒」の句。だが、只の穿ちではな

旧作

手品師の遊んでる
方の手が怪やし

(二三夫)

関西奇術教室

校長 村田瓢太

い。人間の弱さへの客観、反省。酒のすきな人が禁酒するのは大へんなこと。イライラとノイローゼにもなり兼ねない。お神酒を供えるのを忘れるのも自然で、無理もないと思われる。笑って聞ける川柳の一つだが、素直な静馬さんはいつも健全な笑いを忘れてはおられない。

③「阿呆になれ」の句。静馬さんといえば雨が降ろうが、風が吹こうが、ストでも万難を排して川柳塔句会に馳せ参じて二十八年。誰も真似のできない皆出席の榮譽に輝いていられるのが静馬さん。この度のご病気でその榮譽の中断をどんなに残念がっていることとどうするか。病氣見舞にいかれて、いつも、「阿呆になれ」といつてこられたのだ。それも口先だけのものではないことは、静馬さんこそ、その阿呆になれる方だったからだ。今度入院され、心から「阿呆になる」ことのむずかしさと威大さを自分自身、じっくり味わってみられたことだろう。

マルがそうそうもう一つ残っていた。
涙まで出してしまうような大欠伸 (二二九)

「うまそうな」とは何という素晴らしい見つけどころだろう。どんなに「うまかった」か凡人には分らない味だ。その「うまさ」を味わいながら「涙まで出す」というのである。欠伸という生理現象、もちろん誇張はあるが嫌味のないところに静馬さんの味がある。

次はチェックした句。

・目立たずに妻の為さまを直しとく (二三四)

この句集も喜寿を祝ってお子様達の贈り物ということ。よいパパ、よいハズ、几帳面な紳士静馬さんの頗るつきの立派な家庭を羨ましくさえ存じ上げる。

・腹立てぬことがこんなにむずかしい (二〇九)

この紳士も時には腹を立てられるとみえる。だが、ちゃんと腹立ちとの間に距離をおいていられる。川柳が人間静馬を仕立て上げてきたのである。

・剃いてもむいても三月のみかん (九七)

みかん嫌いの私にはよく分らないが、出盛りをすぎて甘さたつぷりのみかんとこの「三月のみかん」を見ているのである。

・もう一べん座つて忘れ思い出し (八八)

文句なし、勤勉な静馬さん。

・寝つかれぬ夜はそこらが痒うなり (七七)

静馬さんはニコリとみせず痒いところを痒いておられる。

・きかぬ子をつつかり叩いた手が痛む (七五)

静馬さんでもお子さんを叩かれるのか。

叩く口実はいろいろ付くが、叩いて一番痛いのは親自身である。

・よちよちを鳩もよちよち逃げまわり (七二)
テニオハの「を」と「も」の使い方に、その情景がびつたり。愛情というより無邪氣、無邪氣というより可愛い。

・へんくつと知らず赤ん坊笑ろてみせ (七〇)
赤ん坊に笑ろてみせる技巧があるはずも、へんくつを見わける手も知っている訳でない。作者の感情。へんくつ男はひよとする

・口止めをしればつかりにしやべられる (三〇)
健全な穿ちの句、全くの正統派。

・裏側も序に見とく菊人形 (二六)
おしやべりが帰つてお通夜寒うなり (二七)
この二句は裏面に穿ちは出ていないが、味

わうと真面目な客観からしか生れない、これこそ本当の穿ちではないかと思える。

・云うとおりにきいた傘を貸してくれ (三三)
ずらした眼鏡の奥から静馬さんの目が見える。

・へたなりに板についてる経木書き (二四)
・神さんのいばん前で拝んで来 (二〇)
・福笹も燃やしてしまふ大掃除 (二八)

・看板屋原稿通り間違える (二七)
・押のけて座つたとは見えぬ顔ばかり (二〇)
偉大なる平凡人静馬さん。七十七年の人生

は川柳という追風をえて、純粹なものを吐き出していられる。謙談に先輩を立てられる勉強家。この句集を通してそれを見せていただく。初心者のお手本でもある。

第一回寝屋川文化祭

市民川柳大会

とき 昭和五十二年十一月六日(日)

正午開場

ところ 寝屋川市総合センター四階
(寝屋川市池田西町二十八番)

京阪電車寝屋川駅下車、京阪バスで総合センター前下車

開会の辞……………山本 三郎氏

祝 辞……………寝屋川市市長 北川 義男氏

講話「幸福への道」……………戸田 古方氏

兼題と選者

「丘」……………住田英比古氏

「川」……………大坂 形水氏

「魅力」……………橋高 薫風氏

「屋根」……………菊沢小松園氏

「発展」……………磯野いさむ氏

席題一題(各題三句吐)
締切午後一時三十分

開会の辞……………江口 度氏

会 費……………三〇〇円

投 句……………受付けません

主 催……………寝屋川市、寝屋川市教育委員会、寝屋川市文化祭実行委員会

後 援……………三井ケ丘川柳会

52年度路郎賞に輝く森井善居氏（右）と
中島生々庵主幹



めずらしく連休の同人総会となった。今年から句会などの案内状も出さなくなったので、出席数が危ぶまれたが、移動性高気圧に覆われた好天に恵まれて、会場の中小企業文化会館の会場五階ホールに、定刻一時間前頃

昭和五十二年度

川柳塔社同人総会

— 昭和五十二年十月九日
— 大阪府中小企業文化会館

有 信 新 之 助

から、参会の同人諸氏が現われはじめて、久淵を叙する挨拶などが交されて、談笑が賑やかになってきた。

午後二時の定刻に、開会を宣する西田柳宏子氏の司会で、川村好郎氏が今年は女性同人の参会が増えて喜ばしい。五十周年記念、路郎先生十三回忌と、画期的な年であっただけに、今後の川柳塔運営に発展的な討議をしてほしい、と開会の辞をのべられ、つづいて中島生々庵主幹が、卒直な意見をのべて、川柳塔運営のために、意義ある総会にしてほしいと挨拶があった。

若本多久志氏の会計報告では、運営費の大半を占めている印刷費や諸物価の高騰などで

念願の経常収支の黒字化を果すことはできなかったが、決して不健全な財政状態ではないと、各項目に亘って対比しながら具体的な説明があり、黒字化の道は、同人数をもっと増やすより方法がないと、提言された。

西尾菜氏の事業報告では、昨年十一月に高橋操子氏の句碑が、女性川柳人の句碑としては、井上信子氏について二番目の建立になること。故松江梅里氏の十周年忌記念川柳大会。日川協第一回全国川柳大会。奥谷弘朗氏の句碑建立。川柳塔六百号記念大会、路郎先生十三回忌厳修、「旅人」普及版刊行。いずれも川柳五十周年記念川柳大会。三十一回に亘り連載された、東野大八氏の「路郎物語」が完結

した。鳥取の森田若人忌。たけはらの第二十回近県川柳大会で、二百五十五名を集めた山内静水氏の川柳にかけた情熱を賛え、弓削の西日本川柳大会と川柳小路ができて、そこに次第に句碑が建てられることなど多彩な



栄えある二賞によるこぶ（右から）納史葉・西山幸・森井善居・鹿井千寿子のみなさん、中央は生々庵主幹

行事の行われたことが報告された。

故水尾英断氏の「遍路」、小島蘭幸氏の、「再会」、戸倉普天句集、傍島静馬氏の「柳行李」、故山田季賢氏の「鉄道草」、たけはらの「竹の里」、落合思月氏の「望郷」と、本社関係から七つの句集が刊行された、旺盛な川柳活動の現況を披露された。

質疑応答では、高杉鬼遊氏の安定した句会場確保の質問に対して、従来の金属会館の使用料値上げの要求に応じれば、安定的に確保ができるかと答弁があり、山内静水氏より、暑中、年賀広告の協力を得て、増収を図る提案があった。

各地柳壇に対する活発な論議が行われたが、当該柳社の人の作品のみにしぼって載せて減頁する意見と、各地柳壇に自分の句の載ることが、川柳塔へ入会の引金になるケースも多く、紙数が多すぎることはない、という意見に分れていた。

諸氏の質疑応答が進むうちに、川柳塔発展のために誌友の増えることが、直接には増収につながらない矛盾に逢着して、経営上の立場からの説明が行われた結果、結局は同人を一人でも多く得る方法以外、川柳塔発展の道はないという結論に行き着いた。

閉会の辞はおなじみ菊沢小松園氏で、川柳塔の運営も、所詮は中小企業なみの苦労がつ

きまとうものだと、会場の中小企業会館をもじってしめくくり、三時二十分に終了、懇親宴に散会した。（カメラ・板尾岳人）

同人総会と懇親宴出席者―珠笑・奇童（岡山県）漫柳・客遊子・凡九郎・敏・新之助・鬼遊・与呂志・柳宏子・三笑子（懇親宴）重人・肖二・文秋・牧人・古方・生々庵・水客・紫香・葉子・一三夫・雀踊子・萬的・静水（竹原市）善居（同）太茂津・薫風・小松園・与史・幸（懇親宴）好郎・吸江・多久志・栞・千寿子・弘朗（倉吉市）瓢太・美房・柳志・形水・誓二・酔々・日満（鳥取市）鶴丸（松江市）思月・喜風・岳人（敬称略）

★

▼編集室から―うちだけではなく他誌を見ても編集がガタガタになったり、印刷が急に悪くなる場合がある。編集と印刷が一体になることが望ましいが、よほどの特殊な関係のない限り「商売」のほうが先き走りになることは止む得ないことである。

くどくどと書くと言いわけめくのでこれ以上は書かぬが、納入日のムリという場合もあり、印刷所の条件のわるい月も重って出来のわるい号がある。そんな悪条件の中でご迷惑をかけたのが先月号である。申しわけないと思います。

（編集部）

合同句集「竹の里」 発刊記念

第二十回 近県川柳大会

昭和五十二年九月四日

会場 竹原市 大広苑

時 広 一 路

唯一つ心配していた台風も遠慮をしてくれたのか姿を見せず、会員一同張切って大会の前日会場の準備をしているうちに、もう前泊の方がお見えになり始めた。三条東洋樹氏御一行の神戸勢を皮切りに、山陰から尼緑之助氏、河村日満氏、大阪から大坂形水氏、四国から森紫苑莊御夫妻、小松市から吉田秀哉氏一行三名と計十二名、簡保センターと市内の旅館に分宿竹原の夜を過ぎた。

大会当日晴れ渡った空の下、受付の準備もまだ整わないうちに藤井明朗氏が一番乗り、夜行で来られたとか、その後続々と出席者が見えられ会場も活気づき始めた。そのうち時化模様の瀬戸内海をグリーンフェリーで大阪から来られた、菊沢小松園先生を初めとする川柳塔社の皆様、寝不足の筈であるのにも拘らずお元気なお顔を次々と見せて頂き本当に有難く思った。五百人はいれる会場も、出席者二百六十名、投句五十六名の盛會に、大会の雰囲気も充分に満喫させてくれている。

会場には路郎先生の御写真、御染筆をはじめ数々の物故先輩の短冊と、先般竹原で行われた当会会員古田鈍舟氏主催の書道一門展の一隅に設けられた川柳展に出品した会員の作品も合せて展示し好評を得た。正面兼題の横には、

竹の里天の青さに触れんとす

小松園

情熱は未来へのびる竹の青

葉

の両先生の祝詞が飾られ、大会を祝福してくれている。会場の机の真白なクロスの上には地元会員の持ち寄った花が所々飾られ目を慰めてくれている。

司会は例年通り若い「たけはら」の象徴である千代美さん、唯今花婿募集中の保母さんである。十二時半開会、静水会長長の張りである声の挨拶から始まり、二十回連続出席者五名の表彰、故白柳先生の後を継いで作句教室を永年指導されていられる菊沢小松園先生と佳句短評から鉄路集短評とこれまた永年竹原川柳会を援助して下さっている石原伯峯先生

に御礼の記念品贈呈、竹原名物出席者男女最高齢者祝賀賞（清酒）贈呈、会長夫人に対する会員からの特別功労賞及び合同句集発刊にご尽力を下さったいづ美印刷社長さんへの感謝状と記念品贈呈が行われ、来賓祝辞として衆議院議員中川秀直氏、竹原市長、竹原商工会議所専務理事、柳人代表挨拶として出雲の尼緑之助氏、小松の吉田秀哉氏、川柳塔社の橘薫風氏、松山の森紫苑莊氏が挨拶をされた。遠方からの出席者を迎え入れたいものだから運営であるので、中川秀直氏の「祝辞は短かい方がよい、五七五調でやりたいものだ」との簡明な祝辞、柳人諸氏の運営時間を考えて頂いての簡単な中に心のこもる有難い激励の挨拶に一同深い感銘を受けた。

一時三十分からの披露も選者の先生方の個性溢れる披露振りに大会も盛り上がり、予定通り四時きっかりに閉会することが出来た。

例年の会場より駅から遠かったにも拘らず、会場の大広苑のご協力と会員の車で送迎も無事に出来、盛会のうちにこの大会を終らせて頂いたことを「たけはら」会員一同心から喜び感謝しております。

最後になりましたが、この大会を盛上げて下さった出席者の皆様、投句者の皆様及び大会に寄せられました御芳情の数々に對しまして、この誌上をお借りして心より原く御礼申し上げます。重ねて川柳塔本社の御協力に厚く御礼を申し上げます。

句集「望郷」を手にして

—現代・川柳界をおもう—

菊澤 小松園

出ずるべくしてついに出了、同人・落合思月句集「望郷」。柳歴正に五十余年、この半世紀に渉る人の初めての句集である。その人の謙虚さを端的に文句なく示している。この句集の何と思月その人を顕示して静かな落ち附いた、雰囲気のない句集だ。

何のケレン味のない誇張のない派手さもないこの人だけ万事、ひかえ目の句集だ。従って当世流からほど遠い思月の姿そのものだ。句集を出すということはすべての柳人の願望であり、何にしても意義あることには違ひは無い。自分の川柳人としての位置付けになることでもあり、重大な行為に連がるのだから多くの人の前に自分の収獲を示す意味に於て長い間苦勞して来た句を列挙して人目に曝す、本当は嬉しい中にも面映ゆい事だと思われる。

それにしてもこの際思われることは近來まだ川柳人というにはまだまだそこまでも到らない川柳の門口を踰て素通りしたような二年や三年の柳歴の人が何を感じたのか堂々と句集と名付けて得体の知れない代物を公表されることだ。盲ら蛇におじずを地で行くこれ等のことに、事実如何に底の浅い川柳だとして二年や三年でこれが川柳だと人に見せびらかす句が出来る筈はない。況んや自分の眞の骨頂を示すような句が出来たら奇蹟だ。こんな連中が句集を出すなど正気の沙汰とは思われぬ。

嘗て私の古い柳友だった清水白柳にしても生前長い川柳生活に於て尚且その生涯に於て一冊の句集も無かったのだ。死後その友人達に依って僅かに遺句集が出来た位のものだ。二年や三年のやっとな川柳を覗いた人達の句集

に似たものを見た時、白柳は本當に嘖き出すだろうと思う。白柳の本職の大工仕事にしても鋸の持ち方、鉋の握り方一つにしても二年や三年に充分には出来ないのだ。それが瘦せても枯れても文学の端しこれにしてみれば先ずはその部類に属する川柳が一寸覗いて何が判ると言うのだ。もっと人間なれば脚下照顧自分の足許をよく見ることだ。それから充分ぐりを見ることだ。行動はそれからでは無いか。大体一年や二年の覗き見族の程度で川柳人で御座いということと自身がすでに精神鑑定ものではないかと言いたい。

以上こんな意味で派手さは今流行の抽象派名吟はないが、これが川柳だと問題なく安心してこれから川柳を勉強しようとして居る人達に見せられる句集がこの「望郷」だと敢て推選したい。(完)

(落合思月氏から本社へ百余冊ご寄贈がありました。本社ではこれを発展費としていただき、一冊七百円《送料共》でお頒けしております)

戸倉普天氏の句集「普天句集」

序文・戸田古方・送料共千円
30年前の日本人の姿がここにある。
本社でお取次ぎいたします。



菊沢小松園選

和歌山市 西山 幸

美しい誤解で綴る銀婚式
狂わない時計は少し窮屈で

八尾市 納史葉

閉ざされた小窓も人を意識する
掌の中の言葉に小さな棘がある
花束へあしたの約束などしない
たいくつな話題の中でひとりぼち
封を切り波紋の広がり読んでいる
出直しへいちばん好きな靴を履く

寝屋川市 江口 度

現実のきびしさ玉手箱開く
不発弾秘めて林檎は真二つ
雲の峰細い絆はまだ切れぬ
十六夜の月はすこし薄情で
望郷の祭り囃子は胸できく

尼崎市 中谷利美

おしゃべりな女へ泉枯れてくる
白百合に恋のささやき聞かれそう
こわいもの矢張り見たい指のすき
灰皿のすき間を埋めていく思案
ネオン塔の上にしらけた月が出る

西宮市 杉浦 婦美子

良人より半歩おくれて明治妻
総入歯だとは知らないご献立
狂信の果が残酷ものがたり
無愛想売り物にして味の店

八戸市 安田 紘

眼を閉じてもあなたの笑顔なら描ける
夕顔の白き炎が闇に浮く
まなざしにすべてを賭ける夜もある

北の秋 りんごの歌も夢となり
子雀へ犬も残したこぼれ餌
鈴虫が応える昼の駐在所

出世頭ビール贈つて顔見せず

三重県 川上富子

慰める言葉も他人という軽さ

妥協点ちよつとずらしてみませんか

喋らせて下さいほんのり酔いました

のびのびと言えども夫の持つ鎖

奈良県 石倉旅風

今置いた石に蜥蜴がもう登り

この町も空があるよと雲動く

夕顔をこちら向かせる風が吹き

月下弦明日も来いよと見送られ

大阪府 文川一念

家中がスッカラカンで晴れて来る

一億の人がいながら誰も来ぬ

両肘が意地張るように角を立て

乗り遅れ汗が吹き出すまだ残暑

熊本市 有働芳仙

人生の半分隋性で生きて来た

指話の指忙しい嬉しい日

病院の廊下が長い車椅子

別居して疑心暗鬼の夜を迎え

岡山県 長尾保

美しい鎖でばくをつなぐ妻

追えばなお逃る女の影ほうし

軽卒の言葉の舌が乾いてる

生活の智恵コマージュルから拾い

奈良県 松田宇宙太

白旗に向ける銃口だってある

満ち足りた顔で敗者の席に居る

隙あらば打ととぜんぜん隙がない

パレットに黒を溜めこむ失語症

島根県 角耕草

港口を出てすぐラインに突き当り

新米の顔も拝まぬ農家なり

キャディにもなれずコースの草を抜く

医師会が開かれそうなゴルフ場

岡山市 清水金太郎

帰り道無い人生だから踏みしめて

補聴器懸けてまで雑音を聞きたがり

どん底になれば親類の数も減り

名医にも我が子に振うメスが無い

羽島市 伊藤静枝

識りたくて考えたくて老の欲

行きたくてあいたい欲を持ちつつけ

たまさかの便り友情たしかめる

鍋磨くその日その日に艶になり

大阪府 新川貞祐

ステッキを帽子売場の隅で選り

萩桔梗八重にこぼれる山のだ

本町も北浜もあるここ場末

Uターン鳴かず飛ばずの都落ち

和歌山市 浦野 和子

繕うて繕うて来た母である

胸に置く踏絵の数も秋ならば

りんとした背筋は過去を語らない

未だ奥があると思わせて居る無口

島根県 飯塚 虎秋

金色に明けゆく野良の父のしわ

青空へみんな脱がせて白く干し

子の寝息鏡の中に妻がいる

残照に悔いを吹き消す風の芯

松江市 梅本 登美也

おめもじは叶わず手紙そつと置く

さびしい日大仏さんの目にすがる

新米に古米倉庫をゆずらない

中年のはしりちよっかい出してくる

今治市 園部 正則

明治生れ表札までがかすんで来

流人島今じゃ観光隠岐の島

足の爪切りながら聞く幼な友

尼崎市 中塚 喜甲

福音の俸を説く束ね髪

稼ぎ手の妻に香水匂わせない

何んとなく家が面白くない若さ

島根県 松本文子

拡げればすぐふるさとを探がす地図

停年も一つの坂として越そう

日溜りに集まる者のふしあわせ

長崎県 岩崎 和子

咲くまでは過保護にされたチューリップ

お世辞でも本気にさせるほめ上手

手の切れる紙幣をかぞえる二度三度

東大阪市 崎山 美子

夏休み先生もちよっぴりなまけぐせ

裏付けがあるので大きな口がきけ

酒のめば上司も仲間と云う気分

松原市 北野 久子

枕位置そつと直して宿の朝

もう言わぬ愚痴が今夜も出てしまい

意地っ張り互いの距離をよう越えず

和歌山市 松原 寿子

一ページで足りぬ旅情へペンの冴え

逢いたい日胸の振り子は揺れやまず

宿命は百も承知の歩幅とも

寝屋川市 柴田 恵美子

まっすぐに鮎のむのどはシルエツト

船頭の若さへ頼る舟下り

復々線完成ここの限界見えてくる

鳥取県 福田 保子

戦友の供養へ義手が疼き出し

惚れている弱身日影の身で暮し
金で買う椅子の弱さがきしみ出し

海南省 牛尾緑楼

父と子の絆同病庇い合い
お守りをひとつ余分に空へ発ち
逆縁を淡々として送る父

鳥取県 金川満春

一石を投じて波紋の中へ居る
中年のスリル企む金と閑
事故現場供養の花が今日も立ち

島根県 岩田三和

実の入りの悪い榎ほど浮きたがり
民主国ロイヤルゼリー分けおうて
レントゲン私の骨は白かった

八尾市 田中紀美代

いつの日かあなた好みに染め抜かれ
アクセント変えてあなたを動かせる
皺ひとつひとつに父の歴史みる

東予市 小山悠泉

絵心があればと思う富士が晴れ
痛いとも言えず盆栽しばられる
妻だけは分ってくれる瞳のサイン

寝屋川市 小林鯛牙子

鬼灯を鳴らす三十路の指の先
まるくまあるく しゃぼん玉風に乗る

残る蚊に午前三時を起こされる

竹原市 古谷節夫

負け犬も嘯付くだけの意地を持ち

綺麗ごとと言っても所詮金で済み

同窓会惚れてたのにと四十過ぎ

広島市 すがかつこ

自閉症赤い風船行ったきり

ほとばりのおもむくままに石を抱く

人参を切るとレモンを切りたくなっていく

羽咋市 三宅ろ亭

臉裏わが半生の過去が棲み

愛と欲まざまざ見せて調停室

襟足に自信がゆっくり階を降り

新宮市 西尾功

台所に唄あり鰻焼く匂い

遠花火やっぱりゆかた美しい

誰もいぬ煙草の灰は口で吹き

大阪市 北勝美

ユニホームきれいな方が勝っており

秀才も金とこねなく落ちこぼれ

一杯の盃肴を喰べ尽くし

名古屋市 大林曲ん手

塩焼きの鯛満足な姿なり

ここに住む鐘が聞える鐘が鳴る

中堅の幹部でつらい板ばさみ

鳥取県 広 富 白 峰

この夢のつづき寝返りうって待ち
面倒なことは忘れて星になる
沈黙が破れ立板に水となり

出雲市 吉 岡 きみえ

日銭追う男の面が雨に泣く
不具の手で握手もとめて悪びれず
平和主義わたしはピエロで甘んじる

出雲市 高 見 鐘 堂

通帳を持って身軽な一人旅
サインしてあって国宝に指定され
西風を堪える土蔵と築地松

吹田市 藤 原 世史春

女湯で妻の声のみよく聞こえ
松茸の姿もみずに秋がゆく
薊には薊の立場トゲに見せ

寝屋川市 福 富 隆 子

竹林を伐ってニョキニョキビルが建ち

鯛焼きが焼きいも屋に戻る秋
秋の雨二人だんまりさぐり合う

大阪市 堀 口 欣 一

東名高速宿場の名だけなお残り
清和源氏遠い先祖を迎るなら
京はよしここに露草赤まんま

岡山県 池 田 半 仙

歯車のバックが効かぬまま廻り

雷が我家取り巻くように鳴り
蟋蟀がコーラス広げ秋にする

八戸市 島 田 昭 治

起きがけに何故か死にたい気もしてる
ぜんまいを巻け巻け巻いて切れるまで
当たらない予報それでも謝らず

大阪市 欄 蘭

凡人でよし偉くなれとは言わぬ父
軍艦マーチ旧海軍のうめき声
皮肉にも見える社長の作業服

北九州市 三 上 春 雄

サラ金で独身貴族の晴れ姿
家計簿は赤字ゴキブリだけ肥り
おもちゃ屋で愛の結晶わめき立て

岸和田市 池 田 香珠夫

だしぬけに鳥が飛立つ奥の院
金の要る話がはずむPTA
愁嘆の割りには少ないご仏前

七尾市 松 高 秀 峰

酔うて来て女本心ちらつかせ
付添がベッドで寝ている程なおり
敬老会寝たきりへも招待状

鳥取県 加 藤 茶 人

言いわけは無言の瞳にある怒り

聞いて欲し愚痴と一緒に来た供養

堺市 玉井邦晴

株屋の娘株を買うのに他所で買

腹這いの脚本でよしドサ廻り

高石市 黄瀬嘉門

萩活けて今年の夏は暑かった

言い負けた方が麦茶をぐつと飲み

大和高田市 岸本豊平次

騙されてやるに見事な名演技

今度こそ信じてくれと又ねだり

倉敷市 斎藤通風

石地蔵聞くも聞かぬも語らない

玄関を入るに手間取る頼み事

尾鷲市 渡辺伊津志

深い鍬土の歴史を刻み込み

無視されぬように領海守つとき

松江市 岡崎雪美

カブト虫ひょこひょこ出かけた運のつき

未来など追う暇のない今日に生き

東大阪市 加藤千代子

栄養食死にたい人がよく食べる

核家族寝たきり老人持て余し

唐津市 田口虹汀

何もかも抱いてあげ潮やって来る

生洲でも鯛は貫録持ちつつけ

妻の留守むなしくスイッチ入れて切り

立ち話雲は流れて崩れ去る

唐津市 岩崎実

住職と神主乗せてひたはしり

縄文の土器に榎あとかくつきりと

唐津市 松垣岩光

井戸端会議座長は人の妻でよし

ブランコに鍵っ子ゆれて陽が暮れる

唐津市 三浦ひろ坊

開かれて白紙のままの日記帖

雨に散る為に咲いたか白芙蓉

大阪市 野田君枝

記念品呈上とありゆくとする

森繁に似た声がする法善寺

岡山市 砂田静佳

うらぎりがつくる女のけものみち

信号の赤ばかり縫う蒸し暑さ

八戸市 小泉紫峰

本心は伏せて対話の笑い顔

野心家の金に縁遠い無性髭

青森県 波ただお

人生の歩み砂丘でふり返り

一匹を釣り上げてから慾がでる

兵庫県 高橋近江

隙もない防備に台風向きを変え糸口を探すに立てる聞き耳か

倉敷市 藤原健二

事ここに至り鈍刀抜いて見せ僕の夢旅行鞆へ詰めたまま

橿原市 西本保夫

悪者になってこの場の平社員愚痴言わず遂にここまで来た定年

大阪市 中辻千子

いる紙の婆ちゃん折るのは鶴ばかりのび盛り何時も着ている寸つま

大阪市 平井露芳

二DKごろ寝の場所を先に決め煮ても焼いても喰わねばなりぬ翮なり

山口県 高崎雀声

注文のくる間グラスの水で耐え買うでなく女鏡を見てなおし

松江市 本庄快哉

朝飯を抜く娘縁談ふりむかず失恋の時とは違うコンパクト

鳥取市 岸本無人

神仏に誓った金が返えされずそのつもりで買った着物が旅さそう

岡山市 井上柳五郎

絵馬堂のはげかかった眼ににらまれる

作戦の涙の顔にしてやられ

岸和田市 清野こう

二号かな旦那らし人来る二階ぬれて行く人にはすまぬ迎え傘

島根県 山根峰雪

達筆の便りに返事出しておくれいらだちの声が出てわが老を知る

岡山市 船越汽水

勝利者に味方するのはいつも風まだすこし甘えの残るインタビュ

和歌山市 坂口公子

輪の中で嬉しい老の顔おどる万歩計立ち止まらせて数を見せ

大阪市 三宅憲司

秋草の真上にのこるは飛行雲洪水の爪あと痛し山の道

富田林市 中村優

物真似で唄い少女が大人びる予約制痛み止らず歯医者出る

橋本市 森脇善彦

人はいさ悲しい涙貰います落石注意どう吹きやいいの秋の風

西宮市 山田喜代子

お互いに眼鏡を探す老夫婦夫婦箸お芋ばかりの日もくぐり

両胸を帯で押えたその昔
ころろぎの隠れた靴の中で鳴き

泉佐野市 大工 静子

見送りにしても別れの派手なこと
鳴き初めの松虫おちよぼ口の声

大和郡山市 今谷 紫園

血の色にカンナは炎える終戦日
送り火の前歯の抜けたままの寡婦

羽曳野市 麻野 幽玄

赤旗もよし戦争のない日本
民宿で見る元勲の冴えた筆

宇部市 樋村 天流

皆さんのお蔭と当り障りなく
形勢の不利へ耳栓詰めておく

出雲市 板垣 夢酔

眉一つ動かさないうで嘘をつき
半日の休み女に夢をくれ

東広島市 石井 さわ子

腹の立つ言葉こらえてふとさびし
軒低く子連れ巡礼ねぎらわれ

松江市 黒目 大島

つまりほめ上手に負けた小銭入れ

滋賀県 柚木 踏草

峰に出た山の仲間にあるゆとり

奈良県 近藤 松枝

知名度は皿で金とるレストラン

泉佐野市 楠畑 正子

人の価値計る目安に利用価値

唐津市 田中 紫浪

アメリカとだけで汚れも落ちるらし

唐津市 山下 勝一

酒たばこボルノ自販機誰が責ぞ

唐津市 筒井 朴竜

家族湯にひとり入って落ちつかず

大阪市 伊藤 暢人

太平洋北極星が笑ってる

香川県 田井 教之

電話するにも明治の型があり

★

町田市 竹内 紫鏑

かくなれば男退く手もなき拳

岐阜市 市川 鱗魚

磯の香が鼻つくちびた漁師町

手の内が読めぬ今夜の接待費

こぼれ麦故郷も土をもう見捨て

テニオハの違い戦後派戦前派

テニオハがどこかで狂う倦怠期

テニオハの違いあられもなき誤植

テニオハは違っちゃいないけど音痴



理容業 津守柳信

強情を通してくれる職に生き
 しいわけ出来た笑顔へ立ちすくむ
 連休へ不況の波がうろたえる
 仕事着を脱いでも笑顔絶えぬ人
 脱理容したい日もある長い髪

振り返ればこの職業に入つて28年も経つておりました。更年期近い女が曲りなりにも自活して行ける腕を持った事をあらためて感謝しなくてはならないと思っております。中でも故路郎先生の調髪も度々させて頂きました事、先生に作句をすすめられながら若気の至りと申すのでしょうか、亡くなられてから南柳師の薦めで川柳を習うようになりました。今思えば一句でも路郎先生に御指導させて頂けばよかったと悔やまれてなりません。理容業界も連休を定めたり後輩の育成に力を入れていたのですが、手つとり早い就職に流れる若者の風潮に諦らめに似た落ち着きを見せている現状なのです。まだまだ引退は出来そうにありません。作句と共に頑張りたいと思っております。

国鉄職員 楨田英詩

働らいた父の陽焼けだ笑うまい
 坂のんのん続いて駄馬の汗尽きず
 トンネル作業終えれば明けの星しぐれ
 国鉄に勤めてストを禁句とす
 昇進の辞令やる気の顔となる

昭和二十二年五月国鉄就職以来今年で満三十年になり、十月の鉄道記念日には効績章の受章通知があったが健康であつたことと家族や職場の人達の協力とご指導があつたからこそと感謝している。近く竹原の御友達が集つて同人の一路さんと共に祝つて貰えるとか。昭和二十二年と云えば食糧事情の悪い頃でわが家も大家族のため食糧が不足して職場へ弁当を持つて行くことが出来ず、昼休みには皆と離れて修理待ちの蒸気機関車の中で時間を過ごした苦い思い出がある。朝鮮動乱の折り繁忙のため残業が続きそのため定時制高校を三年の途中で退学した経験を持つている。ともかく元気で働き又、川柳が出来ると云うことは素晴らしいことだ。



同人特集

南海電鉄本社

辻

圭水

健保料勿体ないよな身体なり
修養を言わず技能をうらやまれ
転勤は一階変っただけのこと
点検の苦労は下積みだけが知り
定年になっても夢を捨てぬ人

昭和十六年十二月戦時中の繰上げで県立和歌山商業学校を卒業した私は、昭和十七年一月南海鉄道株式会社（現在南海電気鉄道株式会社）に入社以来、今日まで三十五年余り、その間、駅の改札・出札、助役、列車区の助役、本社の課員、課長補佐、課長と現在まで入営休職の一年を除いて、病氣らしい病氣もせず与えられた年休も毎年のように返上して、健康で働けたことに感謝しています。五年程で定年ですが健康管理には注意していきたい。

和裁 内芝 としよ

一畳で足りる仕事に精を出す
見える眼に感謝の日々の針仕事
洗濯機回って平和な朝の音
巢立ちゆく子へ絵日記の頃想う
色々あったが笑顔で締めくくり

婚約した時、亡夫が呉服を扱って居りましたので、柄の裁ち合わせや急所急所の勉強に指定のお針屋さんに行つて欲しいと、一カ年勉強してから結婚いたしました。

有田の片田舎生れの私はランプの灯で暗着を縫って居った亡母が今も強く脳裡にやきついております。その血を受けてか私もお針がとても好きで四十年近くお針にこそしんとおります。柄の裁ち合わせのむづかしさ、へらの通らない生地一枚一枚に、各々の難点があり、泣き出したい想いの事も度々ですが、苦勞して仕立上げた振袖を一日吊るして一人で楽しむ事もございます。二男一女に恵まれました私には過ぎた子供達に感謝を致しながら今後共お針や川柳を楽しみながらマイペースの日々を送らせて頂きたいと存じます。



国鉄職員 時 広 一 路

夏休み無縁の昀で朝を出る
不景気を気にせぬ昀の有難さ
合理化へ揺れてきだしたマイペース
サービスサービス卑屈求められ
非番日の窓へ雀がよく喋り

国鉄に奉職して三十年、長く又短かいような歳月でした。親万日の丸と言われ、そうであってはならないと考えている毎日です。
正月も盆も連休も無く、却って忙がしく休憩も取れずに遊びに行く人達を目の前に見てこれも天職だと張切っているもの、時折常識外れのお客様が来て困らされています。仕事が二十四時間勤務なので非番日を含め休みが多く恵まれています、最近では車が多く農家も機械化で騒音が増え非番日をゆっくり寝させて貰えないのには閉口しています。
一昔前と違い合理化時代を迎えのんびり出来なくなってきましたが、私には川柳とゆう心の糧がありますので、しっかり頑張らねばと思っています。

元看護婦 森 田 カズエ

消毒の臭いと戻るママナース
看護婦の秒針生きる音をよみ
看護計画ナースの智恵の持ち寄り
床にしむ汗リハビリのペタル踏み
洗濯機の泡休日を楽しませ

十九才の時看護婦資格を得たのが後日役立ち娘二人を育てるために働きつづけてまいりました。「芸が身を助ける不倖せ」と云う諺がありますが私は不倖せとは感じませんでした。
今年一月定年退職いたしました。が職業柄毎日が緊張の連続でしたが、今日まで健康で働きつづけてこられたことを感謝し懐しく思い出しています。
国鉄診療所に勤務して居りました昭和十六年頃、北川春果先生にお目にかかりました。川柳を作ってみませんかと申された春果先生のお声が耳に残っています。七年程前俄かに作句する気が湧いてきました。御熱心に作句されているみなさま方の後について細く長く勉強を続けてゆきたいと考えております。



同人特集

会社員 平田実男

残業残業寝袋だけとなる我が家
本当のボーナス妻の手から受け
左遷の荷まとめる背中が泣いている
見る人はちゃんと見ていた蔭の汗
仕事着の痛む早さが頼母しい

石油ショック以来不況が続いているセメント業界、今日もまた残業などと愚痴った三白景氣時代を懐しく思い出しております。
会社が呉れたボーナス、独身時代とは違い妻と再びボーナス交渉、今回もまたしっかりした裏づけのある妻の主張へ寄り切られた。サラリーマンにとつて避ける事の出来ないものに人事移動がある。一枚の紙切れが悲喜こもごものドラマを作ってしまう。
上役とは以外と部下の仕事ぶりを良く見ているもので、黙ってコツコツ働いている人を見逃さずに評価してくれる事が嬉しい。
からだ全体で仕事をしている、ブルーカラ、油と汗にまみれての作業着の痛みが激しい、その痛む早さが頼母しくもあります。

主婦 錦織文子

安産の願へ澄んだ鈴が鳴り
お茶を揉む自適の日々へも疲れ
思い出が生きてて虫干はかどらず
ときつける櫛は鼓動を見のがさず
子らが皆集うて母の浄土たり

「戦後という言葉が忘れられようとしている今日、忘れてはならない事があります。朝鮮時代、それは私達の人生で語らなければならない生活体験です。恩師、知人、友人の集りを開こうという情熱に燃えて居ます」
この思いがけない四国からの便りに私は若さと情熱を打ち込んだありし日を振り返って、たまたまなく再会の日が待ち遠しかった。
全国から集った人達との再会は四十年振りの涙の対面だった。敗戦でお互に着のみのままで内地へ引き揚げてから、今日までを語り合うには余りにも短かい一日だった。
今もその感激が私の胸によみがえって来る倅せな一日だった。

教職三十年、現在は造林山の成長を見守り四季の菜園をいじり自適な日を楽しんでいる

愛染帖

橘高薫風選

東大阪市

竹中 綾女

種のない葡萄は赤ん坊のころ

マスカットのあおはおすましの貴婦人で

巨峰はゆっさゆさ田舎出の関取志願

大阪市

河野 君子

家族の巾より出でず姉妹の封書かな

確実にくる死を見つめすぎている

今治市

越智 一水

千羽鶴色を選らずに折り上げる

口紅の色失恋の日から変え

大阪市

小出 智子

傷心を庇いとおしたフライパン

納得をする消ゴムが丸くなる

八尾市

高橋 夕花

炎天にバラの神秘は堪えられず

郵便函溜れて女に秋がくる

東京都

山根 白星

馬券買う人と乗馬が好きな人

唐辛子思ひだすさえ憎い人

岡山県 白岩 文衛

若者の唄を近ごろ父が好く
雪の峰に書けばでっかい僕の句碑

富田林市

岩田 美代

街角の秋は別れに馴れている
貯える千本も万本も吞ます針

青森市

工藤 甲吉

五欲汜濫の日本に誰がした
秋の風孤独地獄の中にいる

松江市

梅本登美也

月よりの伝言すすきの穂がゆれる
応じない女あくまで美しい

松原市

谷垣 史好

笠智衆も僕もうとうと秋日和
安らぎは母といただくハッタイ粉

竹原市

三宅 不朽

夕焼のどこかで鞭の音がする
子をうちしわが掌のいまだ瘦せていず

和歌山市

津田 与史

年金生活何処か空気が抜ける穴
保護色が嫌いで孤独に慣れている

寝屋川市

小林鯛牙子

敗戦日大連生れの妻と居て
蓮の蠟燭半円の視界あり

新宮市

大矢 十郎

大正一桁私に怖い人ばかり
見た通り言えは傷つく人がいる

島根県

榊原 秀子

盆あけの雨は地にしむ胸に沁む
きもちよいペダルわざわざ遠まわり

大阪市 西出 一栄

秋の雨老いの孤独に触れて降る
穏やかな微笑の中に吸いこまれ

寝屋川市

江口 度

秋晴れへポストも走って見たくなる
平行線やがて交わる時がくる

神戸市

小野富美子

ささ舟のように流れてゆきたい日
せき止めてほしい流れになつて

米子市

石垣 花子

赤紙の来た日は追憶から消せず
母と子の話題の亡父は若いまま

岡山市

砂田 静佳

夏休み終つてやれやれ冷蔵庫
いいお人だったと偲ぶ姑の味

大阪市

本間満津子

花一輪挿したコップに労られ
世の中を上手く泳いで悔いもち

今治市

月原 宵明

三十で割れば給料貰い過ぎ
そろばんを縦横にして店の暇

岸和田市

池田香珠夫

透かし見て哀れわが肺わが肋
菊作り競い合いしが共に亡し

島根県

小砂 白汀

盗聴マイクが仕掛けてある足の裏
落ちた実が枝を見上げる風の中

岡山市

井上柳五郎

赤エンピツこちらを向いている恐怖

伊丹市

桧谷 漫柳

八尾市 大路 美幸
ハンカチの白はわたしの白でない

富田林市 中村 優
生命の限界点滴停止する

尾鷲市 渡辺伊津志
震災忌松林のさしみおり

守口市 羽原 静歩
チャップリンに胃かいようななどはなし

神戸市 小浜 牧人
男という言葉で男口説かれる

大阪市 有信新之助
男が着る赤は女に選ばせぬ

大和郡山市 石倉 旅風
喜寿の目に爛爛として女体見ゆ

大阪市 文川 一念
鉛筆は後から消せる代物さ

大阪市 藤田頂留子
ワンマンカー一人のお客乗せて行く

東大阪市 竹中 肖二
つまずいて小さな石をふりかえる

大阪府 新川 貞祐
残りフィルムであの時用を撮っておく

鳥取県 広富 白峰
凡夫だと言っても罪は消えませぬ

大阪市 北 勝美
三輪の神鳥居の奥は山ばかり

大和郡山市 今谷 紫園
都会から戻れば青し奈良盆地

倉敷市 水粉 千翁
満ち足りて風の匂いにさらされる

京都市 松川 杜的
風鐸を雲に合せて古都を撮る

豊中市 戸田 古方
白い粉をふれば模型の山は冬

鳥取市 河村 日満
小島みな掌から逃げてく寡婦の性

鳥根県 岩田 三和
悪代官米作らんで良いという

和歌山市 若宮 武雄
憎いまで女煮つめる人形師

兵庫県 遠山 可住
動物から見れば人間が檻の中

藤井寺市 西 いわを
算盤の桁まで稼ぎもの足らず

大阪市 神夏磯道子
定期入れ十年前の花名刺

唐津市 田口 虹汀
紫陽花が女のすべてとも云えず

京都市 都倉 求芽
太陽が二つ欲しい夏休み

鳥根県 堀江 正朗
音もなく来て声かける草履にて

倉敷市 小幡 里風
野犬ですら尾を振る日もあり妻の紅

八尾市 宮西 弥生
お別れの刹那を飾る火の言葉

神戸市 来住タカ子
三度目に聞かされる愚痴風にやる

東広島市 高橋 鬼焼
鍵束のひとつに母の艶がある

大田市 藤田軒太楼
結構な話じゃないかとうわの空

岡山県 直原七面山
やりくりも知らずビールだおつまみだ

大阪市 江城 修史
若さへの郷愁飾るものがなし

堺市 玉井 邦晴
没法子先生の子が塾通い

倉吉市 奥谷 弘朗
書記長にするには線が弱すぎる

今治市 園部 正則
童心に戻りたいわと悪女の瞳

豊屋川市 宮尾あいき
先立った夫恋しやいやな日は

貝塚市 行天 千代
母の日や敬老の日とありがたし

高槻市 若柳 潮花
末席の芸なかなかのものを持ち

鳥根県 飯塚 虎秋
草刈機父はむつり鎌を研ぐ

神戸市 宇佐美和子
少し渴いた顔で九月の風に遇う

大阪市 欄 蘭
高原で浪曲唸って居た男

香川県 田井 教之
酷寒の地で名を成すと北へ去る

宇都市 樋村 天流
空きドラム缶よ積まれて古稀の顔

海南市 牛尾 緑楼
花嫁の涙は過去を流すのか

和歌山市 野村太茂津
懺悔の長さに異土の花匂う

羽曳野市 麻野 幽玄
どの風も信じていない柳かも

平田市 久家代仕男
古傷を鉋で削る非を削る

米子市 佐伯 越子
白紙だから楽しい夢を書いて見る

橋本市 森脇 善彦
石仏の許で平和な蟻家族

島根県 堀江 芳子
訳聞けばどっちも違っていない夫婦

滋賀県 柚木 踏草
お互の腰の手リズムを持つヤング

堺市 伏見 茂美
夫婦の絆二世どころか切れちゃった

和歌山市 西山 幸
彼岸花燃えて逢う日へ耐えている

岡山県 出原 敬一
燃える物燃やす庭にも秋は満ち

唐津市 筒井 朴竜
虫の声觸れ眼孔に秋深う

東大阪市 加藤千代子
何時死ぬか分らぬ目なりアイバンク

倉敷市 斎藤 通風
豪快に笑った男の孤独感

唐津市 桑原 掬治
確実に伸びる雑草擧時計
まだ炭鉱があったか落盤事故の報

松江市 黒目 大鳥
九十九才の伯父を祝して

八戸市 小泉 紫峰
鶴亀のよわいに賭ける祝白寿

倉敷市 藤原 健二
商魂は不況カルテの中泳ぎ

和泉市 西岡 洛辭
残り香のなんともうしろめたい部屋

和歌山市 松原 寿子
詩ひとつ拾って少女瞳がきれい

尼崎市 黒川 紫香
世を泳ぐあなたがくれた命綱

唐津市 佐々木久隆
走っても子に追いつけぬ歳になり

出雲市 板垣 夢酔
夜市から使いもしない物を買

京都市 山本規風
納骨に己のスペース確める

岡山県 池田 半仙
樺太を睨む岬をソ連船

生駒市 草深 酔升
愛情も計算ずくの倦怠期

枚方市 宮川 珠笑
正直に並んで乗って掛け損ね

堺市 高橋千万里
みのむしも顔を出してる大茜

八戸市 島田 昭治
秋はもう熱い番茶の飲み心地
ミスあれば腹切る覚悟を子が笑

宝塚市 吉田 笑女
納骨堂アパート連想してしまい

唐津市 山下 勝一
この子等も一人歩けた様に言い

唐津市 橋口 輝雄
茸狩りに植えた松茸萎びおり

唐津市 三浦ひろ坊
抓み食い朝めし前の日曜日

羽咋市 三宅 ろ亭
何もかも家計にひびく事ばかり

唐津市 岩崎 実
小六のアルバムへ今昔の比較

唐津市 小山 悠泉
反芻の過去の一コマ又も追

柏原市 小谷 葉子
痛い程抱いてやりたい妻が亡

唐津市 新岡回天子
何かひと言足りないままに冬に入り

唐津市 水漬いて庄屋の家系話する

〔評〕巻頭の綾女さんの投句の添書に、今

月は一寸変った句を作ってみました、とあ

った。十年一日、隋性で句を作るのではなく、

何か一つ新しい境地を開きたいと意欲を燃や
すが一人でも現れることは、選者もうれし
いことである。作者もそうだが、選者も飽食
隋飲ではならぬと思う。第二句は概念的と云
えるが、第一句は殊に感覚的にも独特な鋭い
ものがある。作品で最も大切なものは素材で
あり、素材への心の傾倒である。作句の秋、
力作をお寄せ下さい。

おふくろをおどす道具は遠い国

いろ街の遊び位なら、知って知らぬふりもしようが、うつ、買う、飲むの三道楽が揃ってはもう立派な遊び人である。

親爺ももう母のとりなし位では、うごきそうにもない。勘当ときまっては水の手がとまる。道楽息子にはそれが一番怖ろしい。そこで考えついたのが「遠い国」である。何んとしてでも父の心を翻えさねばならないが、その父をうごかすものは母より外にはないので

麻生路郎選

評釋 古川柳の味

八木摩太郎清記

最後の手段に訴えたのである。「もう斯うなれば遠い国に参るより致し方がありません。永い間不孝の限りをつくして来ましたがこれ以上は迷惑をかけることもありますまい。どうかお母さんも、おからだを大切にしてください」と暗に死を決したような口吻を洩らす。斯う云われて見ると、若しかという気が出るのが女親の情である。必死になって、父の強硬な態度の緩和につとめるのである。

貸さぬ奴種々物入りを言ひたてる

金を借りに行った時、そりや困るだろうと云って、直ぐ様貸してくれる人は稀にしかないだろう。多くは、いろいろと物入りを云い立てて貸してくれないものだ。

金の番とろとろとしてうなされる

いっそ一文なしが盗られる心配もなくて気楽だというのも、あながち貧乏人の負け惜しみとも思えない。金がうなるほどあっても、使い道を知らねば金の番人に過ぎないのだ。とろとろとしてうなされるなんて全く情ない話。

からかさを雲で返す律義者

「どうも有難うございました」とまだ傘のたれてる傘を返す人は実に律義者だ。うっかりすると貸し下されになりがちなのが傘だ。雨があがったら、自分の傘でも忘れてしまう人間が多い位だから。

蚊帳へ蚊を入れる娘の髪 の出来

結いたての、しかも気に入った髪 の出来栄に奮をつぶすまいとグッと蚊帳を高くさしあげて這入るので蚊を入れたというのである。うまい見つけどころだ。

風吹けばどころか女房大あらし

風吹けば沖つ白波立った山夜半にやひとり君の越ゆらん、とは源平朝臣の妻が、風の吹く夜に女に逢いにゆく夫を案じて詠んだ歌だが、その歌のように女房が夫の身を案じるどころか恰気が大嵐だと云ったのである。

片棒をかつぐタベの河豚仲間

昨夜一緒にふぐを食った、そのうちの一人が毒にあたって死んだ。今日はその葬いであるが一緒にふぐを食ったよしみに棺の片棒をかついでやるというので、しみじみとさせられる句だ。

かみなりをまねて腹掛やとさせ

こどもは裸がすきだ。裸になると逃げまわってなかなかつかまらない。

「ソラ、ごろごろごろ、かみなりさんがお臍をとりに来るよ」と、おどかしてやっとう腹かけをさせたというのである。

書置はめつかりやすいとこへ置き

先立つ不幸はおゆるし下さい。どうせ生きてはいられぬ身故などと、書置をしたためたが書置ばかりは一時も早く見て欲しいため、めつかりやすいところへ置くと云ったのである。

かうさして行きやれと破傘をかし

傘を貸してあげよう、こんな世帯をしていては、除けな傘がない。幸い破れ傘ならある。しかしきりきりと回して見て、破れてない部分を見つけ斯うさして行きやれと云って貸したのである。

傾城の涙で蔵の屋根がもり

遊女に泣きつかれると、無理な無心と知りながらも、聞いてやる。幾ら財産家の息子でも、金が井戸水のように湧いて出るものでもない。ついに蔵に穴があいてしまう。それを蔵の屋根が洩りと云ったのである。

(つつく)

秋晴れ

岩井本薩棒選

秋空へゴルフの球を見失ない
 秋晴れへハイミスの洗濯あわだし
 万年床干す気にさせた秋の晴れ
 秋晴れの山が呼んでる旅心
 停滞の車窓に澄んだ秋の富士
 秋晴れに出掛けるあてもないテレビ
 秋晴れの校門モールで飾られる
 郊外へ出て秋晴れのすばらしさ
 秋晴れて園児と踊る若いママ
 秋晴れにわが子のビリを追うカメラ
 秋晴れへ祭太鼓の音も冴え
 秋晴れの山にすすきの穂が招く
 秋晴れへ誘い合わせる墓詣り
 秋晴れにふと留守番の母思う
 秋晴れを眺めておれない冬仕度
 秋晴れのうちにと蟻は忙がしい
 孫の守り秋晴れの野を共に駆け
 秋晴れの浜一ぱいに網を干す
 秋晴れの渚に高く蛸を干し
 秋晴れに肥りたくない腹も空き

芳仙 保夫 軒太楼 正則 右近 素身郎 勝美 登美也 方大 千子 茶人 春日 木魚 カズエ 道子 無人 善彦 恒治 虹汀 宵明 満津子

秋晴れへ活発になる腹の虫
 秋晴れに糸瓜の棚がじやまになり
 秋晴れの峯の向うに故郷がある
 晴れた空鳥に残す柿一つ
 秋晴れてお握りのまま子を起こし
 秋晴れへ足を伸ばして握りめし
 やんま飛ぶ明日香の道の空青し
 秋晴れて嵯峨野街ねる人の列
 秋晴れに気だけはあせる老いの坂
 秋晴れてどこへも行けぬ農繁期
 どんと鳴る秋晴れの空ユニホーム
 秋晴れの田ん圃いくさの音となる
 子のくれし秋晴れの旅老夫婦
 売られ行く牛秋晴れへ啼きつづけ
 山晴れて栗がはじける里の秋
 秋晴れへ新婚の窓小さきすぎ
 秋晴れへト刷毛雲のあつてよし
 秋晴れの富士がうれしい母の旅
 秋晴れを方言飛んでる旅に居る
 父の目に秋晴れはなし娘が嫁ぐ
 秋晴れの届かぬとこに熟れた柿

秀峰 静枝 静泉 貞祐 ろ亭 三十四 綾女 肖二 和子 翁童 回天 代仕男 規不風 花子 悠泉 漫柳 浸る 重人 洛醉 緑楼 里風

秋晴れへ夏の情性を叱咤する
 良い返事くる予感あり秋晴れる
 秋晴れへああ職安の列が混む
 秋晴れへ雀まるまる肥つて居
 秋晴れやおらが村にも嫁が来る

秀峰 静枝 静泉 貞祐 ろ亭 三十四 綾女 肖二 和子 翁童 回天 代仕男 規不風 花子 悠泉 漫柳 浸る 重人 洛醉 緑楼 里風

人

秋晴れへがり勉の子を誘い出し
 秋晴れへ栗の実太れるだけ太り
 秋晴れへお茶がはいった菊いじり
 秋晴れの里は今年も笛太鼓

耕草 七面山 里風

千歳飴

舟木与根一選

千歳飴はつくり入れて撮るカメラ
 商魂の最たるものに千歳飴
 千歳飴この子に賭ける太い夢

秀峰 芳仙 ひろ坊 宵明

千歳飴親の欲望しやぶらせる
腕白も羽織袴の千歳飴
三和
千歳飴大人の夢も練り合わせ
掬治
パママを連れる坊やの千歳飴
カズエ
千歳飴を捨てて怪獣をねだり
漫柳
千歳飴母の願いもつめてあり
道子
海将の礼服が持つ千歳飴
方大
着飾った母が主役の千歳飴
花子
千歳飴投げだしチョコレットへ走り
芳仙
千歳飴明治の味を噛みしめる
静泉
神主の商魂千歳飴くれる
翁童
千歳飴嘗めミニ紳士ミニ淑女
どんたく
素通りはさせぬ露天の千歳飴
木魚
育児法通り育った千歳飴
正則
千歳飴この手に銃は執らずまじ
本蔭棒
千歳飴此の子は神の子ふたりの子
重人
ちちははがある伴せの千歳飴
宵明
石段はパパの背を借る千歳飴
里風
碧い瞳のレディも今日の千歳飴
邦晴
住
スナップに持たす千歳飴色を撰り
貞祐
生きていれば五才千歳飴買う供養
茶人
恍惚へ孫がしやぶらす千歳飴
朴竜
ママの敷くレールを走れと千歳飴
踏草
迷い子の手にしつかりと千歳飴
悠泉
人
千歳飴売れて氏子が育ちゆく
地
実

勤労感謝

吉原紅月選

菓子老舗千歳飴など売り出して
古方
千歳飴貰い子だとはまだ知らず
素身郎
天
勤労の成果が稔る稲の出来
軒太楼
弱き者勤労感謝の日も稼ぎ
正則
怠けてはおれぬ勤労感謝の日
登美也
この齡となつてラッシュに揺れる幸
どんたく
夢酔
毎日の勤めへ感謝の靴を履く
春日
老人も子供も勤労感謝の日
道子
勤労感謝退職金へ近くなり
度
勤労に感謝年金では食えず
緑棲
スランプの無い勤労を感謝する
豊生
病床で勤労感謝の日が辛い
克枝
恙なく今日も帰った定期券
木魚
働ける伴せ朝夕掌を合せ
思月
家計簿は伏せよう勤労感謝の日
優
出稼ぎに勤労感謝などあるか
方大
鎌で稲刈る楽しさを孫に云う
カズエ
勤労感謝五体のネジを締め直す
踏草
勤労感謝空しい祝日つくりだし
みのる

勤労の感謝忘れた労働歌
悠泉
両親がまだ稲刈りをして呉れて
耕草
勤労感謝今日は子供と遊園地
回天子
とつてつけたように勤労感謝の日
伊津志
勤労感謝老人ニコニコ道を掃く
肖二
勤労感謝空虚は誰も語らない
規一朗
働けるだけがとり得という感謝
和子
茸狩り勤労感謝のスケジュール
虹汀
働ける身の伴せを神に謝す
ひろ坊
勤労感謝そんな日知らぬコップ酒
可住
前借りで勤労感謝の日を遊ぶ
無人
勤労感謝の真昼を居候が寝る
洋々
勤労感謝の休みはさんでハネムーン
七面山
汗かかぬ人も勤労感謝の日
三和
住
理屈など無し働ける身を感じ
隆子
失業へ勤労感謝の日が憎い
漫柳
働けるまだ働けるのが嬉しい
古方
猫だけが留守居勤労感謝の日
代仕男
茶碗に箸おいて拝んで心足る
宵明
人
勤労感謝きょうも夜警へ夜が白み
静泉
手に合った仕事幸せですと祖母
右近
天
地下工事勤労感謝の日も進み
花子
軸
勤労感謝の日も地下足袋を履いて出る

初歩教室

題「正」

本田恵二朗

窓を額縁にして、小堀遠州作の名園をあき
ず眺めている私——あの滝の水源はどの辺で
あろうか、あの流れはどこへそそいでいるの
であろうか、あの道はどこから来て、どこへ
抜けるのであろうか、などと想いをめぐらせ
ていると、遠州という非凡な作家の非凡な意
欲が少しずつ解ってくるような気になって、
魅せられてしまつと共に、名園の表側の姿の
よさだけを鑑賞しただけで批判することの早
計を知らされたのである。

名句佳吟を鑑賞する場合も、それと相通じ
るものがあることを再確認した私である。

(静岡県引佐町井伊谷、龍潭寺庭園にて)

正視する目を信じてのゴールイン

正しきが勝つと決らぬ実社会

(正論が勝てぬ日もあり生きる道)
かけ合いへ正直者が邪魔になり

緑 楼

同

久 栄

(かけ引きへ正直者がけむがられ)
正直の頭が馬鹿にされ

(正直が馬鹿にされられ生き続け)

正面の席だから力を入れて見る

(正面の席居眠りを許されず)

毎日が正念場で日をつぶし

(毎日が正念場で汗を拭く)

正攻法一本が怪我を生み

(正攻法一本鎧がボキリ折れ)

正確過ぎて動かぬ設計図

(設計図正確過ぎて動かせず)

正直は損じやないぞと神の声

正面に反骨者が来た示談

長い経つぎつき正座陥落し

(説経延々正座が陥落しはじめる)

訂正印捺して青空見上げたり

(訂正印捺して見上げる青い空)

多数決で正否の決ることもあり

(必ずしも正とはならぬ多数決)

誹謗する友を正義感が拘い上げ

正面を切つて足場が汗となる

(正面を切れば足場が汗で濡れ)

正確な時計が憎い訣れ道

正解を探し続けて生きている

正道を歩く疲れた泥の靴

(正道を歩く泥靴とおしむ)

正義感溢れ勇気が不足する

正格の型に押し込むからこれ
正確に刻む時計の針に焦れ
(正確に刻む秒針もどかしく)

静 子

茂 美

頼 次

同

紫 園

同

柳五郎

同

静 泉

同

通 風

同

幸 杖

同

同

正論が拍手の音にかき消され
新人の良さはねばりの正攻法

(新人の天晴れ正攻法でねばり)

洋服の無理な正座が崩れだす

(洋服の正座へ訓辞の長いこと)

正直を宝とたたき抱いている

(正直を宝と抱いて隅に生き)

親不覚正直な子を叱つてた

(正門を堂々入学金積まず)

正論を吐けば青いとみくられ

正論がまかり通らぬのも議會

正直な作文が家の倦怠期

正論に振り回され尻尾を止めるボス

正直者正直の宝知らず逝く

(正直がなんの足しにもならず死に

の句)

正論にまたゴネ得がからみつき

不可思議な魅力で迫る正義漢

税務署で正直すぎるかと教えられ

正直な鏡で長くのぞかれる

(正直な鏡にこころ見透かされ)

正にその通りネクタイ不要論

正装の妻よそゆきで話しかけ

改正とは正で予算こねまわし

正調の呂律狂つたうれしい日

正義では食えぬ痛みを抱いて生き

現実を正視明日の歩巾決め

翁 童

同

九二老

同

静 枝

同

正 則

同

静 佳

同

伊津志

同

無 人

同

同

(現実を正視歩中に狂いなく)
正直に話す少女の目がきれい
祝宴の正座に下戸が坐りきれ
長病みへわが正体を見失い
長いものに巻かれ正論引つめめる
世間とは正しいだけでは通らない
正式にもらい受けます良い返事
ふところに辞表正論曲げられず
正直と嘘を巧みに使い分け
正直に届けうさんな目で見られ

同 同 慶 同 同 保 同 同 同 同
彦 夫 ヨ

正論を吐くのでけむい人にされ
正直がいつも馬鹿みている政治
正反對同志で妙にうめが合い
正の字が追いつ追われつ気をもませ
丹精の松正直に曲り出し
正論に返す言葉が見つからず
あの時のあの場面では正しいよ
二期期へボタン正しくはめて出し
俗論に押し流された父の正論
正坐した時の心は直すぐに

同 同 漫 同 同 善 同 同 飄 同
柳 彦 太

三十年正邪の道も風化して
正直がうまい記帖と皮肉られ
正当な申出だつたで放つとかれ
俺一人正しかつたで済まされず
正直そうなのが嘘かくしている
息子の名正と名附けて父頑固

同 同 同 同 同 同 同 同
貞 祐
三十四

題一宝一 11月20日締切 (1月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一八九一三四

千七一一 本田恵二朗

ペンの走るままに

八 木 摩天郎

▼九月二十七日の仲秋名月堺市の鳳針供養会の観月会が大鳥大社で催されました、大社神前で宮司祭修載後、同大社参集殿で堺の歴史講演を頼まれ、堺農協つため川柳の婦人川柳会と滋賀県信楽宿泊先から、その足ですぐ帰り、やっと講演を済ませました。殊に「鵜外の妙国寺事件」以来、近年堺事件の誤った論文や小説化しつつある箇所には多数の聴集が耳を立てて聞いて呉れました。

▼九月二十九日堺ロータリークラブの卓話を頼まれて「妙国寺事件のあれこれ」について話しましたが会場の堺商工会議所は地元だけに心易い人々の聴衆には気おくれしました。しかし、以前私がロータリーで川柳を卓話し

ての再度ですのでは是非川柳もまぜてとも云つて呉れました。
▼ローカル紙ですが、新南大阪新聞に八月以来、与謝野晶子伝の連載を乞われて執筆目下掲載中ですが好評である様子です。よろこんで居ます。

▼十月十六日は「第四回堺まつり」で堺の街が賑い、多年の魚夜市川柳句会が臨海工場地となつて夜市句会が、堺まつり協賛川柳句会にかわり、第三十一回市民川柳会の会として堺労働セツツルメントで開催。大多数の参加で盛んでいます。当日は高島屋堺支店で堺市の堺まつり振興会主催で種子島とタイアップで種子島産物も販売され、堺鉄砲も陳列されたので賑い、川柳会の人々も観て楽しんで呉れたと思います。

川柳塔社常任理事会

落合思月氏が句集「望望」を百九冊、本社

へ寄贈された。今日ご出席の中で、まだ手にされていない方に寄贈することになった。
本年12月号から、従来の「〇年度秀句抄」は「〇年度二賞候補作品」と改め、新年号の「ゆゑもあ特集」のかわりに「私の一句」が新登場する。

前者の場合、選者級の作品を候補作品に推しにいくとあつて「秀句抄」に作品が出ないうらみがあつた。「私の一句」となれば、主幹以下、同人全員が自選で自信句を出せるわけだから、「これこそ川柳塔の句だ」と云いされることになる。一年間の作品から一句だけ出していただくので、「秀句」の名に恥じない作品集となるのではないか。この締切は11月25日。(同人に限る)

出席一 薫風・百酒・水客・紫香・生々庵・肖二・牧人・榮・与呂志・岳人・一三夫(敬称略) 常任理事会は11月4日。

(12月は2日です)

大 萬 川 柳

「限 界」

入選発表

選 者 川 村 好 郎
 投句総数 五百二十五句
 入 選 五 十 二 句

限界無視深追いの傷を負う

神戸 牧 人

限界を知れど未練に残る椅子

下関 春 秋

限界を越えた看護にある奇蹟

長崎 和 子

定年は限界でない朝を出る

八尾 鬼 遊

老いてなお恋に限界なきを知る

大阪 あいき

限界へ来て善人の弱き知る

羽曳野 幽 玄

ハッスルをして限界に突き当り

米子 竹 馬

ライバルの距離へ限界を悟る歳

和歌山 富 子

老いの身の限界おもうのも彼岸

笠岡 古 庵

限界を心得ている猪口を伏せ

寝屋川 小 路

この恋の限界を知る待ちばうけ

大阪 智 子

限界へ父のタクトが錆びてくる

大阪 好 一

ぎりぎりですとソロバン伏せられる

堺 千 万 子

限界の私に鞭打つ日の遺影

八尾 弥 生

限界は妻心得てネジを巻く

大阪 真 砂

それとなく妻に限界さとされる

堺 天 笑

限界に挑むピッケルの音が冴え

守口 笑 風

限界へ鞭打つ老父の重い靴

八尾 夕 花

耐えてきた限界家裁の席につき

西宮 多 久 志

限界と知った余生も亦愉し

大阪 ふ み

限界をUターンして道ひらけ

西宮 喜 代 子

限界を知った日妻が酌いでくれ

今治 宵 明

商況も限界社旗は重く垂れ

大田 軒 太 楼

惜しまれて去る限界を知っている

奈良 保 夫

限界を知つてあきらめくせがつき

倉吉 弘 朗

限界を云訳けにして無為無策

和歌山 幸

限界に来てもうぬばれ捨てられず

岡山 静 佳

限界を越えた親身は疑われ

八尾 美 幸

勘忍の限界にいて通す意地

大阪 柳 信

限界を知つた男の背が丸い

奈良 本 蔭 棒

限界を知りつつ体へ鞭を打ち

和歌山 知 也

限界の音を聞いている聴診器

和歌山 和 子

限界へ来てから光る夫婦星

和歌山 和 子

未だ限界来ぬ間の別れが美しい

和歌山 和 子

忍従も限界に来てむつとなる

和歌山 和 子

限界と踏んで妥協の案を呑む

和歌山 和 子

限界にきても迷える小羊か

和歌山 和 子

限界とみたか銀行とりあわず

限界を悟つてからの無口です

限界にさからつてみる意地を出し

限界に助言がほしい気の迷い

限界を越えて汚職の名が残り

泉北 春 栄

佳 句

体力の限界を連れ弧にこもる

大阪 君 子

ふと弱音はく日限界かも知れず

鳥取 茶 人

廻転椅子ある日限界考える

松原 重 人

札束で破れぬ壁につき当り

堺 天 笑

愛憎の限界無口になる夫婦

八尾 夕 花

人の句

東大阪 美 子

限界を知つて鯉のいさぎよさ

地ノ句

限界と思ひまだまだとも思ひ

天ノ句

ぎりぎりを耐えてる耳と気付いて

選 者 吟

限界を知つて決つた進む道

米子 千 代

訂正

前回の「ズタズタになつた心で
する昼寝」は黒田真砂さんの句で
した。訂正おわび致します。

昭和五十二年度

ベストテン (九月現在)

一	花 梢	二四、五	富田林	一〇	美 子	九	好 幸	八	好 幸	七	真 祐	六	惠 祐	五	幸 祐
二	天 笑	二三、五	堺	一一	幽 玄	一〇	多 志	九	久 志	八	多 志	七	久 志	六	多 志
三	夕 花	一七、五	八 尾	一二	可 住	一一	可 住	一〇	可 住	九	可 住	八	可 住	七	可 住
四	一 二 三	一七、五	堺	一三	子 住	一二	子 住	一一	子 住	一〇	子 住	九	子 住	八	子 住

一六	和歌山	一五	鬼 遊	一一、五	八 尾
一六	堺	一六	軒太楼	一一、五	大 田
一五	大 阪	一七	智 子	一〇、五	大 阪
一五	八 尾	一八	弥 生	一〇、五	八 尾
一五	大 阪	一九	本 隆	一〇、五	奈 良
一四	東 大 阪	二〇	宵 明	一〇、五	今 治
一四	羽曳野	二一	惠美子	一〇、五	寶屋川
一三	西 宮				
一三	兵 庫				
一二	大 阪				

昭和五十二年度最終回

「それから」 五句以内

以下略

投稿先
〒593 堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方

締切 十一月二十五日
昭和五十三年度第一回
「再起」五句以内
十二月二十五日

柳俳一味私考

香川県 田 井 清 遊

九月号の尼先生の「柳俳一如小感」を拝読し、私も将来の五・七・五は「柳俳一味一如」になると思っておりましたのでお便りを差し上げた次第です。

六・七年前にはある俳誌に属しておりましたが、いろいろと疑問を抱きながらも打開策が無く、俳誌を去り、友人の紹介で川柳を始めました。

しかし、私なりに俳誌を離れた理由を述べますと次のようになります。

第一に文語が主流を占めており、私のような戦後っ子にはその約束事や文法などが分り

ません。まして口語にさえ悩んでいる男には文語はどだい無理な話です。

第二に、季節や季重りに強く縛られていること——しかしこれは、用い方によっては素晴らしいものになります。

第三に、破壊されているこの美しい国土を憂うならともかく「凸凹高原」で「〇△」という珍しい草木を見つけてまして、庭に植えたんですが、すぐ枯れてしまいました」などと——に至っては言語道断です。天然記念物級の珍木をああい風に自慢するようでは、この俳誌も先が見えたと感じました。

第四に俳句の伝統は——人間探求派などもあるにはありますが——依然、花鳥風詠が主体で、生の人間性に迫る迫力に欠けていること。

第五に俳句は、作者の心中を無理に隠そうとする傾向が少々ながら見られること。

第六に俳句では社会性を盛りにくいこと等

々。

こう書いて来ますと、皆様から柳俳一味じやなくて、川柳「上位」じやないかと叱られそうですが、それでいいんです。もうそろそろ川柳が俳句にとって代って「庶民の詩」となる時期でしょう。

でも栄枯盛衰は世のならいとか。川柳人も思い upper と別の短詩型文学に、その王座を渡さねば、とも感じます。

今や柳俳一味の時代に入ったとは言え、平家物語巻頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」を自戒としながら結びといたします。

★

▼新年号の同人特集「私の一句」の規定が、P 68 に出ています。お見落としのないようにお願いします。▼11月本社句会のご案内もP 68 をご参照ください。

(原稿締切毎月末)

○岡山市津島東四丁目18

日一時から豊岡市瀬戸の瀬

その疲労知らずの健康ぶり

十数年音信不通だったの香川酔々氏（東大阪市長）

長賞)、大路美幸氏(商工

会議所会頭賞)、納史華

さん(市教育委員会会長賞)

がそれぞれ賞状及び副賞の

額を獲得されました。

▼野村大茂津氏(和歌山市

から1観月句会の投句選を

(審判系4氏と大茂津)五

名で無記名でした。一位

は与史、二位は雀踊子、三

位は佐知子の皆さんでし

たが佳作には武雄、幸、登紀

夫、富子、とよ子さんらで

川柳塔系の大活躍でした。

▼大路美幸氏(八尾市)は

大会男というのか、各所の

大会で入賞につぐ入賞、今

や乗りに乗っているという

感じ。

▼52年度兵庫県芸術文化祭

第5回県民川柳大会が10月

9日に、県立丹波文化会館
で開催。遠山可任氏(兵庫
県)は兼題「みやげ」の選
者として出席された。

▼傍島静馬氏(宝塚市)か
ら「私の句集「柳行李」」で
は薫風さんにお世話にな
りました。多くの方々か
ら祝いの品など頂き予期
もしない反響に喜んで驚
いたりしております。

▼岩本雀踊子氏(桜井市)
は五条あかね川柳会、創立
50周年記念大会に「記念」

の選をされた。

▼八尾文化祭市民川柳大会

は一二〇名出席。各題の入

賞者名は「豊次選」山本ひ

よこ「繁夫選」室田千尋

「薫風選」若宮武雄」「千

尋選」森本夷一郎」「藻介

選」山本磯」「吉則選」西

山幸」「栗選」室田千尋

の諸氏で盛遊報

(智子)鬼遊報

▼天正千梢さん(大阪府)

から「今年には春以来、三男

の支店を出すやら結婚のこ

となどで作句もままならず

不勉強に拍車をかけていま

すと。

▼山内静水氏は二賞発表句

会(路郎賞受賞)の森井菁

居氏に付き添って出席され

たが、同行の小島蘭幸氏が

月間賞を獲得、喜びが往復
した。

▼P20上段常任理事は若柳
潮花

▽旅信△

▼大津川柳作家同窓会、福
島土湯温泉から寄せ書き
「東野大八・大井正夫・岸
河村日満・奥谷弘明・岸田
万彩郎・野村太茂津・きみ
諸氏。九太にもさげず五
体を温泉に浄め」太茂津、
小松川柳に「旅館・老
松」から寄せ書拝受。恩月
・牧人・雀踊子・ベ女・喜
風・漫柳・薫風・小松園諸
氏「花芒地酒のうまい旅に
いる」牧人。

▼大田川柳会石見銀山吟行
から「寄せ書拝受。緑之助
・代仕男・軒太楼諸氏はか
▼本多柳志氏から「家族中
で金沢に來ています。小松
の大会へ出席して皆さんと
共に帰るつもりです」白山
の霜を見上げて湯につかり
「柳志」。

▼黒川紫香氏(バンコック
から「9月8日水客君と来
ました。1メアム川聖なる
タイの生活見る」紫香(シ
ンガポールからも一通)

▼尼緑之助氏「日御崎から
寄せ書拝受」灯台に句碑残
照がさんと映え「独仙」ほ
か。

▼鳥取県川柳作家準備会か

ら寄せ書拝受「日満・弘明

・独歩・洋々・雄々・由多

香・三歩の諸氏ほか。

▼村上春巳氏(泉大津市)

から「休暇がとれたので愛

馬にまたがり富士山へやっ

て来ました。」「フアインダ

ーをはみだす富士へ思案す

る」春巳。

▼越智一水氏(今治市)か

ら「第19回郵川連全国大会

で新潟に來ています。

▼11月の句会△

▼菜の花句会は10日(木)

午後6時から近鉄八尾駅前

西郷会館二階で開催。題「

ものさし・紫・聞く・角(

かど) 投句は郵券百円同封

。

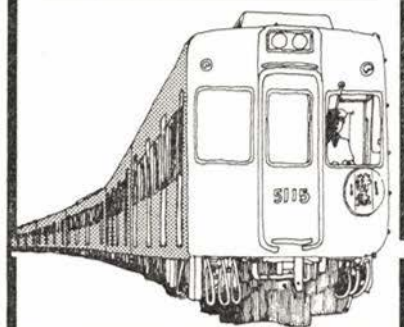
▼千581八尾市高安町北

一・二五・大路美幸あて。

▼南海電鉄川柳会▲は17日
午後6時から南海電鉄本社
食堂内で開催。題「券売機
・研修・たらい回し」
▼大阪川柳会は20日午後
6時から松崎町三丁目大萬
で開催。題は「おはこ・タ
レント・手帖・ねぎらう」
▼川柳大阪句会▲は25日午
後6時から東大阪市立中央
公民館二階第二集合室(近
鉄永和駅すぐ南、市民会館
内)題「文化・霜・避ける
・ブラン・席題二題(当日
発表)。

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



二賞発表句会

会場 文化会館

九日 午後六時

今日こそは「川柳塔晴れ」という好天気である。同人総会に出席された方々は懇親宴でほんのりとした顔を会場へ運ぶ。

柳宏子氏から遠来の浜野奇童三氏(岡山県)山内静水・森井善居・小島蘭幸三氏の竹原トリオ、河村日満氏(鳥取市)柳楽鶴丸(松江市)奥谷弘朗氏(倉吉市)ほか紹介された。

今日はユーモアのある句が多く抜かれ、会場は終始にこやかムードである。これが川柳塔ムードというのであろう。

晴れの受賞者―善居・千寿子・千翁―幸・史葉・曲ん手(欠席者には代理)諸氏が主幹の手から賞状・楯、主幹の色紙などが授与された。

生々庵主幹はなんでも賞を獲得できるのでさらに精進してほしいと柳話を結ばれた。

今月の月間賞杯は、さきごろ句集「再会」を発刊、いま新婚ホヤホヤの「たけはら」のホープ、小島蘭幸氏が見事手中に収められたことは、空の青さに似て底抜けに明かるい。

(受付―児島与呂志・塩満敏)
(進行―西田柳宏子―記録・高杉鬼遊)

出席―与呂志・敏・岳人・三笑子・肖二・客遊子・柳志・吸江・小松園・奇童・与史・珠笑・形水・美房・太茂津・幸・千寿子・善居・静水・新之助・漫柳・凡九郎・美幸・牧人・鬼遊・弘朗・日満・思月・喜風・古方・雀踊子・文秋・水客・萬の・紫香・鶴丸・醉々・栗・生々庵・蘭幸・綾女・あいき・好郎・一三夫・維久子・薫風・史葉・夕花・三十四・静歩・としよ・光代・英子・弥生・きみ・和子・武雄・蘭・醉升・一二三・幸子・寿美子・史好・川狂子・春巳・宇宙太・柳宏子・千万子・右近・恒明・古啓・庸佑・勝美・度・幸太郎・君子・道子・満津子・作二郎・葉子。

席題「自信」

河村 日満選

自信おまっかとか聞かれ神様やないとか云えぬ凡九郎
老いて尚足に自信の遠出する
自信家の鼻は天を見てしまふ
まっすぐに見つめ自信のプロボーズ
台風の進路に自信の無い予報
賽銭をあげて自信がついてくる
職人の自信は煙草くゆらせる
自信ない顔とつれ添い六十年
華やいだ言葉に満ちている自信
片脚を上げた自信のホームラン
ブランコの自信は高く高く蹴り
逆境に生きた自信と言う拳
家一步出ると男にある自信
デンと腰すえた自信に押し切られ
音たてて自信くずれてきた悲哀

自信なくした母の悲しい涙です
履歴書の一行だけがつもつ自信
履歴書に自信の特技太く書く
厚化粧少し自信がつきました
ブレイキの音は自信にすねた音
戦中派飢をしのいで来た自信
ゆるがない自信静かにお茶を入れ
横綱を倒して自信通り
自信持つ男の靴が光っている
十字架にかかる自信のない顔で
補助椅子の手配も済ましている自信
善人の歩幅の中にある自信
真っ先に片手を挙げて来る自信
鬼の首取った自信の軽い口
人妻の自信一人で逢いにゆく
年金がアップ生きて行く自信
階段を二つずつ上る日の自信
雑音の中に自信を持ちつけ
自信まだないのに自動ドアが開き
試歩一步一步湧いてくる自信
合格の寄付を心配する自信
自信のないが貴方が頼りです
雑草の自信は花をつげず生き
恐い自信がツキを呼び戻し
へりくだる態度で炎えている自信

席題「鈍行」

山内 静水選

D51がいるさい果ての雪も踏み
鈍行で酔をさまして行くつもり
鈍行に乗り替え世間が見え始め

雀踊子 武雄 重人 水客 千万子 和子 思月 としよ 一三夫 醉々 漫柳 吸江 紫香 恒明 度 維久子 千万子 小松園 柳志 柳宏子 漫柳 思月 三夫 柳宏子 日満 静水選 日満 三十四 光代

鈍行で通うほかなきとこに住み
鈍行の気になる一人サンガラス
鈍行の天国四天王寺の亀といふ
半生は鈍行でよし虹を追う
鈍行を愛する無しが隅に居る
鈍行列車にゆられてひとりぼっちです
鈍行の窓人情のキビに触れ
鈍行の幸せを知る妻といふ
鈍行に乗りかえてから眠りこけ
鈍行に乗り替え心とり戻す
地方色豊か鈍行荷を背負い
鈍行のあなたの蔭となつて生き
鈍行人生無口な妻が有難し
鈍行の視界しみじみ見る日本
鈍行に乗る事にする曲り角
鈍行で父子の絆とり戻す
鈍行で亡夫のレールを追って行く
鈍行の人生蹟いたりはせぬ
鈍行でちよつとだけ逢う過去の女
鈍行のリズムに編棒余念なし
長い長い旅なら鈍行で行かんかな
行商が乗って鈍行活気づき
鈍行の兄でのれんを守り抜く
鈍行のレールを黙々父走る
鈍行でよう出来た嫁の話しき
仙人の乗る鈍行にばくも乗り
差向い鈍行なればこそ旅
鈍行でゆく父が敷いて来た軌道
鈍行で来た俸せに嘘がない
特急も鈍行も着く目的地
鈍行の父の日課にあるひるね

酔升 英子 夕花 美幸 蘭幸 奇童 水客 右近 紫幸 維久子 菁居 千代 光代 史葉 英子 牧人 新之助 蘭幸 きみ としよ 牧羊 菜 醉々 幸太郎 漫柳 静歩 綾女 千女子

鈍行の主張走れば走れます
極楽が見えて鈍行立ちすくみ
鈍行もたのし続いているレール

兼題「しごき」

高杉

鬼遊選

鋭角に気合いのとんでくるしごき
御意見に行く日はキュッとしごく帯
人形になる女しごきの色を選ぶ
二日酔家族マラソン駆り立てる
しごかれて時計の針を見失なう
しごかれた話戦友会も老け
情報過多コンピュータにしごかれる
千羽鶴の一羽しごきに耐え切れぬ
特訓に意にせずもりもり飯を食い
酔いどれの妻のしごきは黙秘権
特訓と言う名で上手にしごかれる
玉の汗流ししごいてくればはる
しごかれて婿はだんだん旦那ぶり
しごかれてだんだん嬉しくなってくる
女の一生赤いしごきにするのです
しごかれて貴方好みになるのです
年寄りへ何もするなしごかれる
しごかれた事を肴に今日も酔い
しごき役にまわってちよつぱりサドになる
しごいたとPTAにしごかれる
しごかれそうな顔からしごかれる
ユニホームしごきに耐えた色になり
しごかれる度にグラフの棒が伸び
越して来て猫まで仲間にしごかれる
社長から順に伝染するしごき
一念の願いをしごく冬の溜

酔々 小松園 静水 度 漫柳 雀踊子 珠笑 作二郎 美房 柳志 右近 誓二 英子 としよ 太茂津 維久子 史葉 勝美 吸江 弘生 弘生 柳 柳宏子 誓二 千寿子 和子 武雄

しごかれた疼きが軍歌からひびく
慈母観音そのまなざしにしごかれる
しごかれて此の家風に染りまじ
しごかれてしごく涙を見てしま
突っ走るしごき天皇の名をかたり
心太しごきに耐えて押し出され
しごいてるのは一番頭の悪い奴
千丈の谷から落す智慧はなし
昨日来てしごく間もなく辞めてゆき
致死量が書いてないしごきです
撫で肩の男を見るときしごきたし
卑怯にも天皇陛下の名でしごき
新人をしごけばたつぷり水が出る
しごいてる方も時々気がつかれ
しごかれて草むす尿水漬く骨

兼題「朗報」

野村

太茂津選

朗報にスリッパ片方飛んだまま
朗報の次の努力が自重さす
朗報の家はありつたけの灯がこぼれ
朗報を二仲で帳消しする無心
朗報に祖母となる日の準備する
朗報へみぞおち当りが軽くなる
帰宅まで朗報待てぬ赤電話
話さずば逃げられそうない報せ
行きざりの人にも告げたい報せ
薄情な男が死んだという知らせ
朗報になる片棒ならば買うて出る
朗報へ先に着物が気にかかり
朗報へ妻包丁で指を切り
朗報へマサカマサカを繰り返し

日満 古啓 史葉 滋雀 水客 岳人 史好 道子 一三 弥生 史好 夕花 あいき 鬼遊 登美也 弘生 滋雀 百酒 柳信 君子 静馬 珠笑 満津子 小松園 弘生 としよ 好郎 菜

朗報に又サウ金へ用が吹き
朗報に猫のしつぽをふんじやつた
ライバルが先に朗報持つてきた
朗報へ裏の泪も読んでやる
朗報へ木太刀の素振り多くする
朗報の庭キンモクセイが匂います
朗報へ茶の間の天井低すぎる
朗報へむつりしたのが一人いる
朗報へともかく急須の茶をかえて
朗報を靴の中に入れたまま
朗報の主役やすやすと眠ってる
式挙げた日に生れたという報せ
ダイヤルの回りが遅いよいニュース
異状なしじわじわ安堵こみ上げる
朗報へ電話がパンクしそうなり
朗報のベルは別の音で鳴る
朗報へ次の苦勞を論す母
朗報を待つて母を購せない
朗報にちちは折りを深くする
朗報が天下を取つて顔でくる
朗報のまだ信じては貰えない
朗報へとんとん拍子が怖くなり
朗報が長い苦勞をふつ飛ばす
朗報へ寡婦仏壇の灯をともし
朗報へぎっくり腰が飛び起きる
朗報を掌に青空へ叫んだる
朗報がガンと失意を呼び戻す
朗報へ四方の窓を明け放つ
朗報のあと鎖をしめ忘れ
朗報へ静かに菊を活けている
朗報の廻りを暖い風が吹く

一二三
寿美子
道柳
漫客
水客
与呂志
吸江
万的
鶴丸
恒明
柳志
庸佑
重人
鶴丸
三十四
漫柳
道子
美幸
奇童
蘭幸
柳宏子
与史
美幸
形水
再居
与史
史好
弥生
史幸
史葉

朗報の波紋の中に身を委す

兼題「番号」

小浜

牧人選

太茂津

番号で呼んで面会ゆるされる
孤々の声もう番号がつきまとい
同じ番地の隣りは豪奢なくらし向き
自作農園トマトに番号つけて待ち
番号へ男としての起立する
番号で呼んで人権認めない
欠番にしとく配慮を聞かされる
執念は一つの番号追いつく
宝くじ当らぬ番号許り買う
よくやつた胴上げに舞う背番号
番号で呼ばれて失語症になる
堂々と番号つけてびり走る
一億何千何百何十何号とは何し
番号のないロッカーは卑怯者
背番号13背負うユダになる
番号札下さいわいたは草履です
番号で称ばれてスパイに顔がない
番号が母子の絆保育室
一番の札に執念持つマニヤ
背番号子に聞いている選手の名
背番号1へ総理もおちよこちよい
番号をマークされてるえんま帳
二十四番中山寺はお茶にする
番号の順にマラソン帰らない
番号の通りにゆかぬプラモデル
火葬場の出口に番号札置いてある
756号父母へ捧ぐるものとする
菓子折の裏に番号が書いてある

登美也
重人
君子
万的
紫香
思月
水客
形水
柳宏子
三笑子
雀踊子
維久子
弘生
作二郎
醉々
岳人
満津子
柳志
綾女
幸太郎
鬼遊
古啓
勝美
紫香
小松園
岳人
静馬

52年度 大阪市文化祭川柳大会

文化祭賞作品

席題「走る」 住田英比古選

兎にも亀にもなれず走らねば かすを

席題「雑魚」 山下 清緑選

おろし金ちりめん雑魚の好きな父 斗升

席題「掌」 小浜 牧人選

掌に人の情が満ちてくる 幻四郎

席題「顔ぶれ」 米沢 俊夫選

顔ぶれは社長ばかりという雑居ビル 堯旦

兼題「子煩悩」 久保田以兆選

他人から見ればおかしい子煩悩 正和

兼題「花」 谷口 光穂選

とても一途に男を慕う花の首 静夢

兼題「凡人」 菊沢小松園選

凡人の哀れは出世してしまい 反省

兼題「高原」 堀江としを選

高原に住んで疑うこと知らず 柳宏子

兼題「嘘」 岩井 三窓選

美しい別れにしたい嘘をつく 朝子

兼題「最近のニュースから」 広瀬 反省選

名誉ある無所属でよし車椅子 美左

草分けの一人が静かに一人住む
草分けの野球は袴に草履ばかり
草分けの記念写真はピンボケだ
振り向けば草分けひとりだけの席
草分けの足跡にある血の匂い
草分けと唯言うだけでバツとせず
草分けは路面電車をついた頃
草分けの語尽きない未亡人
草分けに赤と言われて来た叙勲
草分けはネオンの灯等予想せず
草分けの貴録見せる鬼瓦
草分けをたずねあぐんだ婦人記者

橘高

登思右雀好幸弘弘与綾き薫
美月近踊郎郎朗生女み風
也月近踊郎郎朗生女み選

開墾の艱草分けとなる重き草分けの一人相談役にする草分けの頃の英語を笑えない草分けの夢が未だに掛けてある草分けの思い出今だから笑え終戦の焼野原から点った灯草分け自認一本杉の雲見てる伝説のままで草分け信じられ草分けがいとも背中を見せている異端者として草分けの選れた道草分けの誇り時流に乗り遅れた草分けは公害の世を予期してた草分けが静かに語る世の流れ草分けの老いし姿に菊が咲く草分けの翁の髭が美しい雑兵のままで草分け老いて行く草分けの人は墓石にて在わす草分けの頃は一族信じていた草分けを支えた妻のSサイズ草分けの匂いを持っている蚯蚓草分けの民具へ観覧料がいり草分けの屍の上に立てる旗草分けの客ヘメードが皆並ぶ好きなこと好きに草分けやっただけ開拓史刀をすてた日にふれず論ずるに草分けの人生きてくる大資本に草分け小さく囲まれる草分けで市史の中にも名を列ね草分けの一人一人が主義を持つ聖書一冊を草分けの力とし

與史 柳宏子 史好 蘭幸 好郎 新之助 萬的 古方 太茂津 美房 柳宏子 珠笑 小松園 三笑子 紫香 三十四 幸 君葉 史幸 美幸 鬼遊 壽美子 肖二 靜馬 水客 太茂津 新之助 醉升 蘭幸 薰風

浦島の白髪は姫の深情け

極楽の部屋は合鍵で開けられる

極楽も地獄も電話通じない

愚痴に過ぎない残り火を消せずいる

原色の街にメルヘン見失う

メルヘンの世界におけば彼は悪

区域地図片手に配達アルバイト

音波の小さくなっていく夜明け

夜明けまでもってばと医師の重い口

ビルラッシュ昔の地図は古戦場

天井板大工の手形残ってる

絵本からメルヘン行きの汽車が出る

極楽行をあきらめている毒舌さ

どんぐり川柳会

谷垣史好報

判断を迫られ選雷聞いている

ナポレオンの帽子かぶってみるけじめ

美しい人が身を引けけじめつく

金は金恋のけじめはつけておく

けじめある彼が物足りなく思え

正直に話せばすつとつくけじめ

黒白のけじめもつかぬまま流れ

真相へちやいかけらが生きている

けじめまでつけた恋に逃げられる

小っちゃな好意も愛のかけらです

稲妻が走ると雷身がまえる

考古学土器のかけらも見逃さず

千年の塔の尖にも避雷針

プライドのかけら厭や味に光ってる

川柳大阪

児島与呂志報

笑風

弘生

弥生

みずほ

寿界

史葉

洋子

秋美

鶴度

弥三郎

豊子

雀踊子

栗

美幸

醉々

惠美子

鬼遊

真砂

吸江

飄太

恒明

克美

サヨ

万里

痴亭

勝美

史好

笑風

爪を噛む癖も一緒に嫁にゆき

タイピンに死にたい程の過去をもち

単線に乗り換えてから旅の酒

乗り換えたローカル線の遅いこと

参院選梅雨の合い間にビラが来る

金の玉磨いてこそその光りよう

乗り換えの支線で懐かし国訛り

銅像がきれいになった俄か雨

悪友と云うことにして仲が良し

タイピンをおんなが止めてくれた朝

酔うくれた玉手箱なら信じてたい

酔うと直ぐ寝る癖チャンス又逃がし

農協へ朝が滴たるトマトの荷

乗り換えて着いた故郷無人駅

定期券早おようそえる娘がきれい

刺著が七味くわえて出前に来

歳月は空気見たいな妻となり

妻の掌中に平和が生きている

川柳わかやま

明日手術静かに天気予報聞く

天つ辺で熟柿は落ち時考える

ある秘密ポストの無口信じてる

月の道戻って自然に身を任す

熟れた柿手箒につめて里の母

熱れすぎて転落と云う道残る

折函の昔が別れの挨拶か

酔どれに抱かれてポスト愚痴をきき

乱筆もポストは同じ顔で呑む

洛醉

双虎

本蔭棒

一ノ字

敏

秀峰

九平

喜醉

君枝

眉水

道子

雅果

重人

閑士

楽々

三十四

漁人

与呂志

津田与史報

千寿子

としよ

幸

与史

恒治

凡九郎

光代

三男

三千代

覚悟して虫も女も丸くなる

覚悟など要らぬ老後の彩を染め

遺言状だけが覚悟を知っていた

正論を吐き口笛と戻る道

旧姓に戻って芸道ひた歩く

戻し税ステッキ二枚でシャンとなる

やり繰りの何処に消えたか戻し税

ざんげして戻る心に道を開け

戻るには女に不利なことばかり

京都塔の会

松川杜の報

梅干を土用の庭へ老母せわし

三十五度真昼茶房でホット飲む

夏蕨高く羅漢の顔かくす

亡き母を偲び土用へ梅を干す

山小屋の灯が好き自分に話せそう

山小屋で陽の出るまでを寝ころがり

佳句地10選 (前月号から)

小林由多香選

駅前のポストは早く着きような

顔ぶれの揃いを司会あごでよむ

退院と聞いてよかつた無駄な足

出直しへ鼻緒のきつた下駄を履く

戸締りをせず交番いつも留守

掃除婦も颯爽としてビルに消え

許せない噂は水にすぐ流す

招かれた理由がわからぬ顔が寄り

独身よさらばきれいに髭をそる

つぶやけば心の届く星である

道夫

きみ

武雄

天彦

弘生

紀川

一風

三栄

富子

美穂

誠史

明珠

和代

潮花

蘭幸

女

決心の朝の茶柱まっすぐに
決心が義理人情でつきかねる

北峰
海圀

ママ昼寝子は這い出して遊んでる
先刻の蠅又来て昼寝あきらめる

つね
満津子

ミステリー読めばクーラー効きすぎ
能面の奥から覗く怪に憑かれ

嗜好
雀一

まる裸その企みにはまれない
あんさん裸だったか云う裸

裸にはなれぬ心にある深傷

汚れてるからおしぼりに気兼ねする

挨拶はあととおしぼりあてがわれ

おしぼりよ主役になれることはない

化けて出ておやり猫の糞死体

結局は自分を化かしている安堵

化けるには化けたが逃げるすぎない

美しく化ける鏡を買いにゆく

安売りはせえしませんと未だ嫁かず

安売りの手ごころへ心ゆれてる

愛情の安売り愚かな母でいる

安売りの寸法へ子供を合している

川柳後案(岡山市) 井上柳五郎報

初産で父と呼ばれる日が照れる

初対面似てる似てると納得し

予定日にきちんと産んだ果報者

お産したニュースを聞けば猫のこと

夕立に誘う穴場の酒に酔い

夕立に駆け込んで来る知らぬ顔

夕立で残暑も一服した餉道

夕立で浴衣が駆けだす夏祭り

無縁墓地ひときわ高い虫時雨

御無沙汰の墓参蠹虫に狙われる

瀬戸の海賊おろし戦友の墓坐り

転々と出世コースは墓を捨て

戦死者の墓が平和を信じきり

すばらしい美人も声でがっかりし

掛声は大きく仕事ははかどらず

鎮彦

思月

弘生

文秋

一栄

恒明

あいき

凡九郎

とし子

智子

柳志

節子

小松園

郎報

梁太

定平

恒友

博洋

昌吾

久米雄

哲郎

正道

秋月

胡風

柳五郎

草風

夏彦

ひろし

佐加恵

長距離の電話大きな声になり

本当の声を聞かない視察団

墓見本スーパードミ顔を出し

日曜の夕立テキパキ妻の指示

川柳しんぐろ

川上大輪報

定価表見て万引は思案する

定価では買えないのに長居され

定価表女は高い方を見る

いよいよの言葉がのどに貯めてある

九回裏望みもついに幕上がる

緊張の極限いよいよ幕上がる

腹きめて妻や子と呼ぶ枕許

いよいよのお産へ母子立ち向い

いよいよという日に金が借りられず

すぐ変る型まで保証書書いていず

福笹の保証は宝くじに似る

十字架へ誓う愛にはない保証

義理ゆえに保証すればこの仕末

保証印の無口が一そうこわくなる

保証ない明日だがやっぱ夢をもち

もうこれが最後の保証とまで言われ

保証した人に保証断わられ

明日への保証は誰もしてくれぬ

いよいよとなつて結婚ふみ切れず

発展の途上いよいよ活気づく

川柳たけはら

森井善居報

廉勝

元一

照路

十郎

まさ子

大輪

雀踊子

武雄

緑楼

柳香

とよ子

富子

溪水

弘生

寿子

澄孝

凡九郎

としよ

平城

直吉

与史

義孝

祥月

静水

松緑

房子

千代美

選挙終つて静かに昼寝ができますね

公約は消えぬインキで書いてはし

朝の食欲独りの頃がふとおかし

打ち水の後から夕立やつて来た

ビルの灯が消えたと明日のバスル組む

うすい胸だから働かねばならぬ

絵ローソク会津の童話語りだす

針を割る藤の気骨がたのもしく

ビールつぎ合つて夫婦の夜が涼し

ねさんにあげたいアセモの出たせなか

ねころんで本読むおねえちゃんだめね

水ぐるま男盛りのこりを解く

萩の町土曜歴史の傷さらす

モードショウ女心が背伸びする

原爆忌下手人誰も出てこない

通り雨のようポーナスが居てくれず

鎖があるから食いはぐれのない犬だ

倉吉打吹川柳会

奥谷弘朗報

空と海眺めて漁夫の朝が来る

家を建てつきはお庭の門が夢

打水庭の佐治石しかと夕化粧

ふるさとの空へ架橋の飛行雲

庭園の古風な造りが気に入られ

つらい過去あつて女のもう泣かず

男なら泣きたい時は女を見る

名人の対局へ庭の無表情

一年の一夜の逢瀬空の恋

笑子

鈍舟

蘭幸

敬子

鬼焼

政己

不朽

善居

そのみ

愛

のり

紫光

一路

かつ子

のばら

節詩

英夫

満春

きくの

千恵子

夕路

碧句

壽雄

車楽

律子

御善

観葉

雄々

庭井戸のツルべに祖母の背を偲び

泣く毎に度胸太って棒のごと

星たちは帰りに寝過ぎた昼の月

一坪の庭に幸せこぼれそう

欲心を空の青さえ見失ない

二百カイレコレラ災害泣き地蔵

大山をわが庭にして山男

濡縁の亦凝り性の庭を見せ

泣きおどしとは解つてもことわれず

自惚れが崩れて涙の壺を割る

打水に庭木も石も息をつき

梅雨の空仰いで案じている田植

駒つなぎ句会

岸南柳報

不器用な手先機械に頼りきり

器用でも家の用事は知らぬ顔

不器用だが私へ愛は行届き

不器用で口説かないから好きな方

不器用はあれやこれやで恥をかき

苦心作器用な人ねと云うねたみ

不器用な人が奇術の本真い

器用さを上役達に利用され

Uターン出来ぬ不器用さが役に立ち

シャツ編んでもくれば器用を見せるだけはやを

不器用なババでどうして置く昼寝

下器用でも妻子養う智恵は持ち

不器用な棚へ釘までひん曲り

お隣りの器用な人の居る予選

自分より器用な人の居る予選

器用さがまた居残りの破目にあい

器用さが邪魔して日曜汗をかき

勇峰

すま子

石花菜

とみえ

豊生

座牛

弘朗

みどり

こしの

独歩

よし子

すゑの

肖二

植太郎

勝美

南柳

儀一

石拾

鎮彦

柳信

綾女

雅風

育園

善信

宏子

小路

器用貧乏所詮ピエロかも知れぬ

上向いて器用に涙止めている

器用貧乏まだやってている手暗がり

和歌山七面句会

中筋三幸報

恋の古傷履歴書には書けず

凡人の汗を政治が吸って

満ちたりた二人へ幽霊出そこない

幽霊のような化粧で逢いにくる

茶店までもう一汗と教えられ

無傷な男で嫁はんがないと云う

ウインドに飾れば傷物とは見え

幽霊で逢いに来ると御冗談

やぶくぐり幽霊の足見でしまう

初盆を迎え傷心疔みがえる

何気なく云われた言葉傷がつき

傷痕に腕白時代はよき時代

過疎の村ゆうれいさきで名を上げる

幽霊の出そうな場所に行く二人

化けて出るにしては台詞多すぎる

傷つて帰れば妻の愚痴が待ち

避けられたハンドル汗がにじみでる

オースケ川柳会

大坂形水報

昔夢夢に欠ける秋の月

月に暈かぶって遠足気にかかる

不況でも月は変らぬ顔してる

屋の月場違ひに出てばやかる

秋の夜の読書ボルトを空にする

読むほどに新書が欲しいつづきもの

ライバルを意識してから読書熱

読書らしい同じ時間に消える窓

恒明

規不風

小松園

其夕

幸

寿子

佐知子

昌三郎

太茂津

富子

和美

淳子

勇次

秀市

光治

ちや

武子

晶雄

ふく代

三幸

諸岡

亜也子

秀川

みどり

野生

哲行

博泉

前田

前号訂正―目次横―足跡を残そう砂の

ある限り―

9月号―目次横―水溜りとびそこねて

も独りかな―

常任理事会(P66) 来月は12月2日。

▼本欄の用紙はゼヒ二十詰原稿用紙でお

願います。

―編集部

読書しながらカレーライスが出来上る一

本棚の背文字ばんやり眺める日

バイキングノサービスの思いつき

食べられる魚の顔にもある因果

地虫にも生きる権利の陽の恵み

不況でも去年どおり虫は鳴き

妻は早味付けの事聞いており

一冊の本で変革する若き

雑音に負けずコロギ秋を鳴く

お別れも華やかにする月夜です

残暑なお犬もご飯を食べ残す

店番が本を読んでる遠い耳

風邪気味へ軽い雑誌の中にいる

三井ヶ丘川柳会

寄附金の札まで踊る盆踊り

千円の価値は昔を語りだす

裸にはなれぬ男の椅子がある

四十前アードに自信ありません

盆踊り出べそが引込めほど踊り

裸一貫男だけにあるメロデー

ホステスに裸でそつと握らせる

ゴーゴーの手振りで入る盆踊り

念

聖地

実

亜成

栄

千夢

一扇

有一

常夢

弥生

形生

入仙

好郎

高田博泉報

てまり

野生

一念

江留美

琴音

恵美子

亜也子

あい

き

裸にされて意外に小さい羊なり
輪の外が又にぎやかな盆踊り
アルバムにパパの可愛い真つ裸
盆踊りそえない恋が進んでる
盆踊り塾の先生という気さく
故郷遠く任地の輪に入る盆踊り
両隣り乏しい千円生きたとき
故里で皆とはずんだ盆踊り
千円の軽さで夫見てしまう
どん底で知る千円のあたかみ
インテリの弱き裸になり切れず
左前の浴衣見つけた盆踊り
餓鬼草紙のような裸が並んでた
なつメロになってみんなの盆踊り
千円の会費でなんだかんだと言ひ

亜博小恒直鉦右眉度柳三千入古塊形
成泉明路鈍近女水宏子仙方人水

裸の煙草が散らばっている 父の苦悩に
紅川柳俱樂部
竜胆の気高さ高原に腰を据え
何かも家計にひびくことばかり
往く夏を惜しむごとくに法師蟬
金持って帰れば家中陽気なり
入選は親の手だった作品展
給料を渡す時だけ妻感謝
子の病氣夫婦で罪のなすりあい
朝のレモンと妻の折りへ癒えてゆく
もう一度出直す若さ欲しくなり
他人はエゴ車イラスト通り魔通
秋晴の予報を笑う縁の猫
捨てられて案山子は誰も恨まない
潮騒に子供は寝る網を干す

虹勝久朴三愛一畑掬岩廣五
汀一隆男郷竿中治光実木

大輪が咲いて自惚れさあ写真
ゆうもあ川柳会
金魚には付けた値段が腑におちず
レール日く交通ストは骨休め
熱い茶を吞んでこらえる客の席
ゴルフ野球パレーと人間球が好き
去る者は追わず風の便り聞く
母の血が頭に父の血が顔に
言い忘れ聞き忘れて夫婦寝る
うみなり川柳会(鳥取市) 小林由多香報

回天子 柳報 春 梢 ひろ 坊 太 一 郎 ひろ 坊 無 人 露 子 みのる

雅号ぶつちやけばなし (163)

こうか



大森孝華

おおもり

雅号ですって? なにもできるものはありません。はなびきの明朗さんと話し合ひでかい気持ちで付きましたが、時々男性と間違われます。女らしい柳名に変えようと思ううちに十年の歳月が過ぎました。不思議にも今は愛着心も産れず、前進あるのみです。水客先生のご指導を頂だし、子や孫に句集を残すことが出来、感謝致しています。川柳は性にあったと申しましようか、縁に触れたと言いましようか、作句の境地がいちばん楽しみです。今は息子の経営する印刷会社を見守って暮らしています。

風雪の日記、雅号と共に老い

会社役員・大正二年二月二十五日生

(本名孝子)

言葉とはあべこべ心見透され
伝来の染めの渋さでまだ不遇
言うことがあべこべ易者あてにせず
銀婚へあながた選んだ泳者の柄
マスコミが触れて運動政治めき
せめてもの俸せ道ごとないくらし
あべこべの謬妻も負けていず
指人形泣く子にやさしく語りかけ
心まで逆さに写さない鏡
夫唱婦随時にあべこべでいて平和
にじみ出る涙が銀の花咲かす
聞か役の方の涙が先に落ち
金太郎ケース飛び出す身の構え
性格とあべこべ渋い芸を見せ

由多香 貞山 洗々 豊生 静枝 葉士人 無 人 華子 辰春 夕路 おさむ 富美湖 喬水 舟宏 笑王 純平 熊生 純

川柳塔社同人総参加（一人一句）

新年号「私の一句」締切十一月二十五日着便を飾る「私の一句」締切後の分は次号で発表

52年度で「自分の句は、これだ」と思われた一句を提出してください。

（ユーモア特集は発展解消しました）

年賀広告受付！

本誌五分の一段二千円です。

グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・十一月末日

あなたもぜひ一口

この寸法が400円です

川柳塔社

振替口座大阪
三三五六九番

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）

「晴れ着」吉岡美房選
「手綱」松下たつみ選
「鶴」山本素郎選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）中島生々庵選
水煙抄（10句）菊沢小松園選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）

「鯛（いわし）」新谷笑痴選
「うどん」有信新之助選
「吉日」中川晃男選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

来月の本社句会は12月7日

本社十一月句会

兼題	「染める」	「配列」	「城跡」	「瓶」
席題	二題	当日発表		
会費	三百円			

★投句だけのの方は切手百円封入

会場 十一月七日（月）午後六時
金 属 会 館
南区 鰻谷東之町10番地
電話 271・3935番

柳話 戸田古方
（今月の出題・香川静々）
板尾岳人選
香川醉々選
黒川紫香選
西尾菜選
各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

12月の兼題 「指針」 「交渉」
「人間味」 「柳

定価 四百円（送料29円）

半年分 二千五百円（送料共）

一年分 四千八百円（送料共）

昭和五十二年十月二十五日印刷
昭和五十二年十一月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番通

編集兼 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社

郵便番号 5442

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

ゆーもあ特集発展解消

★昭和41年新年号から「ゆーもあ特集」を載せだして12年間、その成果はともかくとして、毎年新年号には同人諸氏のお顔をそろえただけで編集部狙いは達したのです。そこで月並みに「発展解消」ということばを使って、12回で打ち切ることにしました。

★前号の用紙を厚くしたのが送料が32円になるのでやはり元へ戻した。体裁ばかりもいっておれんです。

★大坂形水・橘高薫風、谷垣史好諸氏と、前号発送の

カッケ 肉体疲労時の ビタミンB₁補給に アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



タケダ

日、雑談しながら「ゆーもあ特集」にかわる「私の一句」の新設が話題になりました。P 68を読んでください。

★「はたらくうた」は13回目になりました。タイトルは古くなったが中味は新鮮なので今後もつづけていきます。

★毎10通以上の封書やハ

▼葉子コーナー

▼一世を風靡したマリ・クワントのミニ・スカートのがすつかり廃れ、近頃はヤングよりもおとなを対象としたファッションを重視している。

▼素材よりフィーリングで着る時代になったようです。

▼和服の事なら少しは分る私ですが洋服で自分の個性を出せるようになるまでには、もっと年月を積みなくてはいけないのでしょうか。

ガキが届き、一日怠けると30通近くになってしまいうのである。柳誌のほうの送金はめったにないが、もう一つのほうの送金のほとんどはうちへ来るのでこれが一番シンドイ。金銭には計算というものはあちゅうの苦が手である。雑誌の割りつけも字数の計算だが、これはあまり苦にはならない。金銭となるとどうもい

けがない。誤算が当たりまえのようになっていくけど、こちらの方は誰も文句をいう人がいないので今のところ無事である。一通ずつ済むと机の右横においてある紙屑入れへ封筒などをやぶいてほりこんでいく。タバコの吸殻や灰、バナナの皮などもそこへほりこむ。つまり紙屑入れがいっぱいになるということだ。その紙屑入れとは、スーパーマーケットの例のハトロン紙の袋である。それがいっぱいになると外のゴミ入れ

へほりこむのだが、新しい紙袋を机の横へ置くと心気な一転さあ次の仕事にかかるとなにか心引き締まるのを感じるのだから、見るみるうちに紙屑入れの紙袋がふくらんでいく。それだ仕事がかどついていることになる。だからよくにとつてはこの紙屑入れが仕事のバロメーターになっているわけだ。

★少平の頃、アヤシゲなものを書いて「少年倶楽部」や「日本少年」などに投稿していたが、そのころ「没書箱」というコトバを知った。ダメなモノはその没書箱とやらいう箱へほり込んでいくのだそう。だから没書箱というモノがすくなくももったものである。そんな経験から、ぼくはどんな原稿でも捨てずに、ちゃんと保管してある。それがかなりの嵩になっているのだが、一番多いのはぼくらの原稿である。ぼくはペーシの末尾を白くアケルのがイヤだから、かならず穴埋めを書く。しかし、読者か

らそれに相当するような行数の原稿が届くと、原則としてぼくの原稿を捨てるところにしている。なのに人様の書いたものをなぜ発表しないか。いろいろ理由があるけれど、まず死んだ原稿つまり書いた当時はニュースになったかも知れないが発表が二か月後になるとそのテーマがクサってしまったから。だから月刊誌などにはキワ物は損である。

★もう一つ困るのは締切無視の原稿だ。前の10月号も8月の末に予定の割りつけをすませ、9月10日ごろには全部印刷所へ入れてある。そんな時、ひじょうにいい原稿が入ってくる場合もあるが、約束してなかったのどうしようもない。たとえばそれを入れるとすると、一ページだけふやすわけにはいかず、二ページか四ページふやすことになる。四ページふやすと支払額がちょっとかわってくる。ここが編集担当者のつらいところである。

★年賀広告をまたよろしくお願いいたします。
(不二田一三夫)

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿

政府登録国際観光旅館 ホテルパシフィック

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿

政府登録国際観光旅館

鳴門

政府登録国際観光旅館

鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理

観光旅館

紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに

観光旅館

淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル

ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



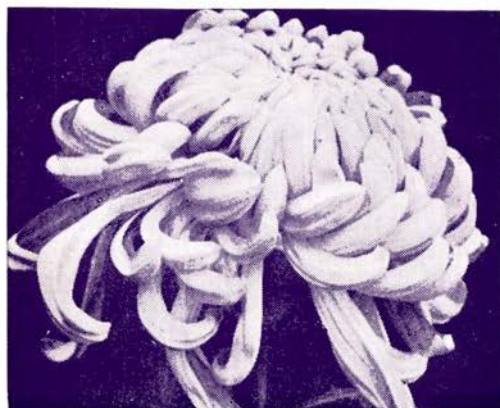
南海電鉄

一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗



宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影